

OSAKA SANGYO UNIVERSITY REVIEW (53)
ACADEMIC SOCIETY OF OSAKA SANGYO UNIVERSITY



学会報53号によせて

中村 康範

大阪産業大学学会 会長(本学学長)

ACADEMIC
SOCIETY
OF
OSAKA
SANGYO
UNIVERSITY
2017

大阪産業大学学会は年に一回、学会報を発行しています。今回の学会報のテーマは『未来と夢』としました。この学会報の主な内容は、この一年間の学会の活動内容の紹介と報告ですが、学会の学生会員の皆さんの『未来と夢』を今まで以上にサポートするため、教員の方々からの寄稿や留学記なども掲載しています。教員による寄稿や留学記などを通じて、学生の皆さんには自分の夢を実現するための手がかりを探してほしいと考えています。

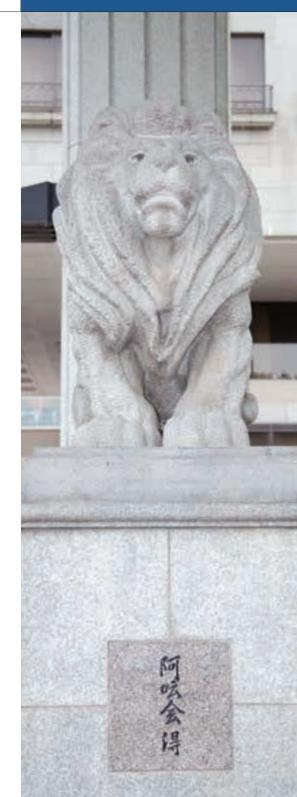
学生の皆さんに参加してもらえる学会の活動としては、学会コンテスト、各種見学会、学内で開催される有名外部講師を招いての講演会などがあります。昨年度の学会コンテストの優秀作品や各種見学会の感想文はこの学会報に掲載されています。学会コンテストは主に夏休みを利用して作品を完成させるもので、昨年度は「ぶんかくコンテスト」と「写真・イラストコンテスト」を行いました。学会主催の見学会としては、鈴鹿サーキットでの安全運転研修、羽田機体工場見学会、東京証券取引所と各種メディア(テレビ朝日・読売新聞)見学会、全国美術館巡り(富山県立美術館など)、神戸港の各種施設見学会(造船所・コンテナヤード・税関)、陶芸作り体験会(兵庫県篠山市陶の郷)、和菓子作り体験会(滋賀県大津市叶匠壽庵)を開催しました。これらの見学会には他学部の学生や先生方も参加されるので、学内での修学以外の学びを広げるだけでなく友達作りにも役立つものです。

学会報以外の学会の刊行物として論集があります。これは、講義などを 担当される先生方の研究発表の場となりますが、学生会員の皆さんがゼミ と呼ばれる卒業研究や卒業論文の執筆に役立つものとなります。論集は 大学の図書館に置いてありますが、学会の公式サイトにある「論集データ ベース」からも閲覧できますので、是非とも参考にしてください。

学会はさらに、学生会員の皆さんにより充実した在学期間を送っていた だくために海外研修や海外での発表などに対しても支援しています。

学生会員の皆さんが「誇りを持てる大学へ」をタグラインとし、在学中にしっかりと『未来と夢』の意識を持てるように、学会はこれまで以上に多様なコンテンツなどの提供を考えています。まずは、学会のさまざまなイベントに参加してください。そして、学会に対しての皆さんからの新しいコンテンツなどのリクエストを待っています。

皆様には、今後とも学生会員および正会員の活動へのご支援、ご協力を お願い申し上げます。



CONTENTS [目次]

	巻 頭 言 学会報53号によっ 平成30年度学会行事予定一		《大学学会 会長(本学学長) 中村	寸 康範 —— 4
06	特集 未来と夢 未来と夢 未来と夢 未来と夢 ************************************	(国際学部) (スポーツ健康学部) (経営学部) (経済学部) (デザイン工学部) (工学部) (全学教育機構高等教育センター)	堀江 莉奈 松田 光弘 田村 康介 方 穎 中島 悠貴 谷 雄一 山田 嘉徳	— 7 — 8 — 9 — 10 — 11
14	学会企画事業 関西国際空港見学会に参加して 鈴鹿安全運転研修 羽田機体工場見学会に参加して 東京証券取引所と各種メディア見名 和菓子作り体験会に参加して 全国美術館巡り(富山) 神戸港の各種施設見学会に参加して 陶芸作り体験会に参加して		嶋田 萌 ———————————————————————————————————	— 15 — 16 — 18 — 22 — 23 — 24
28	コンテスト報告 - コンテスト優秀作 第18回「ぶんかくコンテスト(体験 デンマーク オレロップ体育アカ	品	藪田 学 ————	28 32
40	講演会報告 金田-秀穂氏学術講演会 世界-	受けたい日本語の授業	青山 一樹 ————	—— 40



42	留学記 海外留学記 アメリカ留学記-東西海岸でのフィールドスタディより ドイツUDE留学記:フィールドワーカーとして、新たに目打 海外留学制度を利用した米国臨床研究留学記	新 新 新 手	*******	- 44 - 48
56	学術研究書出版助成本の構 変化を生きながら変化を創る一新しい社会変動論への記 日中大学院生学術フォーラム論文集『東アジアにおけるグ	式み 北里		- 56 - 57
60	学会主催事業 新入生歓迎企画 入学宣誓式プロジェクトを終えて 第4回日中大学院生学術フォーラム & アジア共同体センター 「グローバル化とその反発」 経済学部研究会開催報告書	澤崎 一国際シンポジウム 古名 李	谷 眞介 ————	- 60 - 61 - 63
66	学会後援事業 アメリカスポーツ医学会(ACSM)EIM on Campus表章第54回日本文芸学会全国大会報告熊本地震復興支援チャリティ講演会/東北復興支援活動「輪島朝市の見学、金箔貼り体験、およびゼミ合宿」報告記第4次産業革命時代における経営・流通に関する特別学では、「体罰に頼らない指導をめざして」~日米の比較調査からみえてくる	村日 助 宮崎 書 酒 類 術講演 朴	井 博章 ————	- 68 - 69 - 72 - 74
78	平成29年度 学会活動報告 ————————————————————————————————————	年度学会常任委員長 東島 		- 78 - 79 - 82

- 平成29年度編集委員長 大津山澄明

編集後記

平成30年度学会行事予定一覧

EVENT INFORMATION

4月	学会報配付 見学会実施予定ポスター掲示	新入生・在学生に配布 (学内要所にも置いています)
6月	学会コンテスト作品募集ポスター掲示	学内各学部掲示板・学会公式webサイト・ポータ ルで案内
7月	1泊2日見学会説明会	学内各学部掲示板・学会公式Webサイト・ポータルで案内
夏季休暇期間中	鈴鹿安全運転研修(1泊2日) 羽田機体工場見学会(1泊2日) 東京証券取引所と各種メディア見学会(1泊2日)	
10月	学会コンテスト書類審査・最終審査 ※優秀な作品は学会報に掲載されます	
11月	全国美術館巡り見学会(1泊2日) 神戸港の各種施設見学会 和菓子作り体験会 (※新規見学先を検討中) 見学会プランニングコンテスト募集ポスター掲示	
1月	見学会プランニングコンテスト書類審査	
2月	見学会プランニングコンテスト最終審査 ※優秀な見学会プランは次年度以降開催予定	
※適時	学会主催·共催講演会	

※見学会、講演会等の学会企画事業については、適時、学会公式webサイトでもご案内します。 ※学会コンテストの応募内容や詳しい情報は、学会公式webサイトや学内掲示のポスター等でご確認ください。 ※各種見学会は、募集人数に制限があります。詳しい内容につきましては学会公式webサイトやポスター等でご確認ください。

学会公式webサイト https://as-osu.jp/

〈学会に関する問合せ先〉—

本館8階研究推進課事務室内 学会事務局 072-875-3001(内線:2815) お気軽にご連絡ください



堀江 莉奈 国際学部 国際学科

私は大学で中国語を主に学んでいます。よく周囲から 「なぜ中国語を学んでいるの?」と聞かれます。たしかに、 英語やフランス語などたくさんの言語がある中でなぜ私 は中国語を選んだのか。その理由は二つあります。一つ は、小学四年生の時に、父の転勤で九ヶ月間シンガポー ルに住んでいたからです。シンガポールは多民族国家で、 英語や中国語など様々な言語が飛び交っていました。英 語は、英会話教室に通っていたのでほんの少し理解する ことはできたのですが、中国語は何を言っているのかさっ ぱりわかりませんでした。しかしその時から中国語に興味 がありました。

二つ目は、近年の訪日外国人(インバウンド)の増加に ついて興味を持ったからです。私がこの大学に入学する前 からニュースで訪日外国人についての特集がたくさん組 まれていました。この特集を見て日本を訪れる外国人のう ちのほとんどが中国人だったということを目の当たりにし て「中国語を話せる日本人は少ないのではないか?」と疑 問に思いました。通訳者や観光案内をする人など、それな りに中国語を話せる人はいるとは思いますが、少なくとも 私の周りでは中国語を話すことができる人に会ったこと がなかったので、私は中国人観光客に快適に日本での観 光を楽しんでほしいと思いました。この二つの理由が中国 語を選んだ理由です。

そして中国語を勉強し始めて半年が過ぎた今思うこと は、想像していたよりもはるかに大変で難しいです。しか し、クラスの人数が少ない分、わからないことはすぐに聞 けるし何よりも先生方が丁寧にわかりやすく教えて下さる ので理解しやすいです。習って終わりではなく、授業以外 でも中国語を使うようにしています。普通、LINEの会話 で毎朝友達と野崎駅で待ち合わせして学校に行く時に、 日本語だったら「野崎駅に〇分に着く!」「わかった」とい うやりとりをすると思いますが、私たちは、「你们八点半到 吗?」「我八点半到」のように中国語で会話をしています。 間違っていたら先生が教えてくださります。またこの大学 には中国人留学生が多いので中国の話をしたり、簡単な 中国語で会話をするようにしています。こうやって日常生

活でも楽しく学んでいます。

正直、私がこんなにも語学に対して真剣に取り組めて いることに少し驚いています。と言うのも私は、興味を持っ たものはすぐチャレンジするのですが、途中から飽きてし まい中途半端に終わってしまうことが多く、あまり物事が 長く続くということは滅多になかったので、今のこの環境 にとても感謝しています。

今年の9月から一年間上海に留学することになってい るのですが、今は不安でいっぱいです。現地の人と会話が できなかったら、友達ができなかったらと考えてしまいま す。しかし、その未来は今の私に託されていて全ては私自 身の行動次第なので、「できなかったら」ではなく「できる」 に変えられるようにし、充実した一年を送りたいです。そし て前で述べた中国人の方々に快適に日本で旅ができるよ うにお手伝いをしている未来であってほしいです。

今回、この「未来と夢」という題名で執筆する時、私の 「未来と夢」が何なのかわかりませんでした。しかし今ま での経験、今の日常生活を書いてみて私の「未来と夢」が ちゃんとあり、繋がっていっていることに気づくことができ ました。今しかないこの生活を大切にし、途中で諦めずに 私の「未来と夢」に繋げられるようにしたいです。

スポーツ健康学部 スポーツ健康学科 准教授 松田 光弘

主体的な深い学び

中・高の教員を退職し、子どもたちによい体育授業が 実践できる教員を育てたいとの思いから大学教員となっ た。大学で教育法を受講している学生は例外なく教員免 許の取得を目指している。そこには、教員になりたい学生 と教員を育てたい先生という同じ目標を持つ者同士が存 在し、侃侃諤諤と議論するような授業が…。あれ?寝てい る学生もいるが、ここでは触れないでおこう。しかし、全体 的に授業態度が気に入らない。実に受け身な授業態度な のである。例えば、「運動に苦手意識がある生徒に対して どのようなハードル走の授業展開が考えられるか」という 質問をすると、「わかりません」と答える。学生なのでその ような答えも許されるかもしれないが、ハードルを前にし た教師がいざ教えようという場面で「わからない」では笑 い話にもならないのである。「わかりません」と答えた学生 たちは不真面目か、といえばそうではない。むしろきちんと 板書したことを一文字も漏らさないようにノートへ書き写 すなど真面目に授業に取り組んでいる。先の質問の続き だが、どうも学生たちは私の答えを待っているようである。 表情にも「私たちの考えはいいから、はやく答えを教えて」 と言いたげだ。「そうじゃないんだけどなぁ」教育現場で は、充分な授業準備をしても必ずしもスムーズにいくとは 限らない。そのような場面で適切な対応ができるのが真 の教育者である。そのためにも、考えようとする力、つまり 主体的な深い学びができる学生を育てていくことが重要 であると感じている。

対話的な深い学び

運動の得意な学生が保健体育科の教員を目指す。もちるん間違いではない。しかし、運動ができることと学校で教えることとは全く違うということがなかなかつながらない。運動に対する自信を持っているせいで、教えることができると考えているのかもしれない。そこで、「生徒みんなの運動量を保障するドッヂボールを考えてみよう」という課題を与えると、ボールを2個にしたり、サイドからの攻撃を可としたり、王様を決めてその人が当てられると全滅

になるなど、いろいろな意見が出てくるようになった。しかし「だれかを忘れていないか」と指摘すると、「審判が必要です」確かに正解ではある。指摘の仕方が悪かったと反省しながら再度「みんなの運動量が保障されているだろうか」さらに「ボール運動の苦手な生徒が最初の方で当てられて外野に行ったら、その後は?」学生たちの表情が引き締まってきた。ここから本当の体育授業づくりを学ぶ授業が始まっていく。仲間や教師の意見を聞き、自らの意見を組み立てていく。このように対話的な深い学びができる授業は本当に楽しい。

未来の教員を育てるために

中学・高等学校と教師をしてきた私にとって今の学生 たちと向き合うということは、今日の日本の中等教育を受 けてきた成果と向き合っているということになる。つまり 学生たちと日々接していくことは、今の教育に何が必要な のかを知るヒントがそこに隠されていることになる。それ を見出し、教員を目指す学生たちに授業を通じて「よりよ い保健体育科教育とは」を還元していくことは、学生が教 員となりこれからの子どもたちに有益な教育をおこなう力 量となり、少々オーバーな表現ではあるが、有益な教育を 受けた子どもたちがこれからの日本の将来を担うことにつ ながっていくのだと考えている。おりしも次期中学校学習 指導要領が公示され、そのキーワードの一つとしてあげら れているのが「主体的・対話的で深い学び」である。先述 の二例にもあるように、このような学びが今の学生たちに 必要なのである。手ごたえを感じる一方で、まだまだ手探 り状態の部分が大きい大学教員4年生ではあるが、専門 性を生かして、今後の教育・研究活動に邁進していこう と考えている。

田村 康介 経営学部 経営学科

私には夢がある。それは市役所観光課の職員になるこ とだ。その理由は、衰退する街を守りたいと思うからだ。そ してそこには、私の故郷が関係する。

私の故郷、米子市は鳥取県西部に位置する人口 十五万ほどの街だ。もともとは「山陰の大阪」とまで呼ば れた商業の街で、街中には大きなデパートがあり活気づ いていた。私も子どものころ、家族に連れられて活気ある 街を歩いた。街には活気が満ちていて、祖父とはデパート で買い物を、祖母とはボウリングをし、両親とは街の映画 館で映画を見た。しかし近年になって周囲の市や町の成 長や大都市への移住が増えたことによって衰退が進行。 人々は米子への関心をなくし、大都市や周囲の街にお金 を落とすようになった。人口の減少に歯止めはかからず、 その活気はすっかり消え失せ、映画館は取り壊され、また かつて人であふれかえっていたデパートはすっかりもぬけ の殻になり、昨年店をしまい、そして今では解体作業の最 中だ。そんな衰退する故郷を見て、私は世の中には私の故 郷以外にも衰退してしまう街があるのではないかと思っ た。そしてそういった街を観光課の職員として活気づけ、 守りたいと思うようになったのだ。

しかし、そこにたどり着くには障害がある。まず一つが、 そんな夢が叶う可能性なんて極めて低いということだ。そ もそも市役所職員、特に観光課などを取り扱う一般事務 職員の倍率は他の職員募集に比べても格段に高い。人口 減少に歯止めがかからない米子市でさえ二十倍以上あ るのだ。そしてさらに一般事務の中で観光課に配属され るその可能性は極めて低い。だから市役所職員になるた めに日々勉強を行い、面接で落とされないよう人間性を 磨き続けなければならない。そして、市役所職員として採 用された後も、だれよりも観光課に入りたいと熱意を伝え なくてはならないのだ。

そしてもう一つが、私自身、本当に市役所観光課の職員 になりたいのかどうかわからないということだ。もちろん、 自分では市役所観光課職員になるつもりでいて、周囲に もそのようなことを言って回っている。しかし、それになる というのが自分の本当にしたいことなのかと聞かれたら、

すぐにそうだと言えない気がするのだ。衰退する街を救 う。それは間違いなく私の夢で言葉にするのは簡単なこ とだ。しかし、街を救うのには想像もできないような事務 たちが待っている。果たして私はそれらの仕事と正面から 向き合うことができるのだろうか。子どものころ、必死に なってサンタクロースにおねだりしたおもちゃは、すぐに 飽きて見向きもしなくなった。子どものころ、あれだけなり たかった学校の先生の夢はすっかり心の中から消えてし まった。私はまた、サンタクロースにもらったおもちゃのよ うに、熱烈に抱いていた夢のように、市役所職員の夢を捨 ててしまうのではないかと思う。それが恐ろしい。公務員 試験対策のテキストを開きながらいつも考えてしまうの だ。自分は本当に市役所の職員になりたいのか、と。

しかし、私はそれでもいいと思う。高校の時までは勉強 して頭のいい、「いいところ」を目指すのがすべてだった。確 かに高校の時からそれ以外の所に価値を見出している人 もいたが風習としてはより良い、より賢いところに行くこと がすべてに思えた。しかし、大学から先、社会に出てからは 違う。学力がすべてとは言えなくなり、人間性を見られ、そ してまた「いいところ」を決めるのはほかでもない自分自身 になる。大企業でも過酷な企業がある。収入がよくても自 殺者が出る企業がある。世の中には学力のような一面だ けでは測れないものごとがたくさんあるのだ。だからこそ 今は頭を使って自分の歩むべき道を、そして自分に合った 道をしっかりと見定めなければならない。そして就活まで には明確で芯のある答えを見つけたい。

経済学部 方 穎

夢とは何なのか? それは将来に実現させたいと思っていること。夢という単語は、私が小さい頃から一番よく知っている、大好きな単語である。英語ではDreamだが、中国語では夢想(meng xiang)という。夢は誰もが持てるものである。

私は夢を話題にすることが大好きで、よく友達と夢について語り合う。私は幼い頃から世界のいるいるなことに興味がある。小さい頃の夢は、いるいろな「家」、「者」になることだった。例えば、画家や音楽家、冒険者や科学者など、私はその時々に知るようになった職業をすべてやってみたいと思った。そして、世界のすべての国に行ってみたい、自分の目で世界を見て理解したいと思った。そして年を取るにつれて、やりたいことがますます増え、夢も大きくなった。私の今の夢は、世界一周旅行をしながら訪れた先の国々の文化と言語を勉強することである。「Travel around the world. Work around the world. And study around the world.」ということである。私はいろいるなことを体験し、経験を積みたいと思っている。

日本に留学することにした一番大きな理由は、日本のアニメのナルトに近づきたいと思ったことである。ナルトは私の小学校3年生以降、今までで一番大好きなアニメである。ナルトは私に、自分のことをずっと信じて、絶対にできるなど、いろいろなことを教えてくれた。ナルトは私にとって、大事な友達みたいな存在である。そして、日本に留学して以来、たくさんの夢が現実になった。例えば、私は音楽がずっと大好きで、学校の音楽プロデュースプロジェクトに入った。そこで自分のバンドを組んで、よくバンドのメンバーと一緒にライブをやる。初めてライブをやった時、とても緊張したが、良い経験を積むことができた。それに、それ以後のライブでは、時々緊張するが、だんだん自信も増えてきた。それをきっかけに、今年から出演の機会が多くなった。将来にもしできれば、もっと大きい舞台に出演したいと思っている。

私はいろいろな仕事をやってみたいと思っていたので、 日本に来てからいろいろなバイトに挑戦した。今までに やったことがあるバイトは、マクドナルドのレジのスタッフ、 ユニバーサルスタジオのジムと免税店のスタッフ、居酒屋のホール、テストの試験監督、百貨店で化粧品の通訳者などである。だいたいは短期または単発のバイトであるが、良い経験を積むことができた。そして、このいろいろな仕事を通して、さまざまな知識を吸収し、たくさんの友人を作ることができた。将来は、さらに多くの異なる仕事を経験してみたい。

私は小さい時から、自分の将来について、いろいろと計画することが好きである。これまでの私の人生は、だいたい小さい時からの計画に沿って進んでいる。大学卒業以後は日本の大学院に進学するつもりである。私はインテリアデザインについてずっと興味があるので、大学院ではインテリアデザインを勉強したいと考えている。子供の頃から、いつも部屋のデザインや配色に気を配っていた。今も自分の部屋のデザインを定期的に変えている。インテリアデザインに関する知識は3年生から独学で勉強するつもりで、4年生のうちにインテリアデザインに関する資格検定試験を受けようと考えている。そして、できればまたイギリスやアメリカへ留学したいと思う。

私は、何かやりたいことがあったら、絶対に頑張って やっていく。自分のことを信じて、すべて可能性があるとい う話を、私はずっと信じている。そして、私はさまざまな困 難に直面するたび、そのような信念はいつも私に勇気をく れて、困難を乗り越えた。私が夢を追い続ける途上で、私 の家族と友達は、私のことをずっと応援してくれた。家族と 友達には本当に感謝している。人生は1度きりなので、後 悔しないよう、自分の全力で頑張って、自分の夢を叶えよ う!



"夢"と"未来"の違いとその関係性

デザインエ学部 環境理工学科 中島 悠貴

"夢"という言葉を聞くと、「将来の職業」や「大きな目 標」などが簡単に想起され、それは時に人を大きく動かす 原動力となる。しかし、「将来は○○になって~をする」や 「目指している○○をする」などは、個々のいわば"妄想の 世界"でしかなく、実際にソレが起こるとは限らない。むし ろ、儚く叶わないことが多く見受けられる。では、"未来"と いう言葉ではどうか。「今後の自分」「歩む道」…などが想 起され、"夢"と大差ないように感じられる。しかし、"夢" との大きな違いは"未来"は「良いものでも悪いものでも必 ず起こるものであり、来るものを避けて通ることはできな い」という"現実の世界"なのではないかと推測する。そし て、悪い"未来"によって、結果的に潰れてしまうものが"夢" である。

この自説を、私の"夢"とそれに関連した想定できうる悪 い"未来"で当てはめて考察してみる。まず私の夢は教職 員になることだ。「これからの日本の社会を支えていく子 供達に、教員という立場から様々なことを教え、そして自 分も学んでいきたい。また、歳を重ね、教員退職後はゆっ たりとした毎日を平和に過ごしたい。」というものが私の 夢である。しかし、現代の日本の社会から想定できる未来 を予想すると、その私の夢は潰れてしまうのではないかと 考えられる。教職員になれるかは自身の努力次第である が、「ゆったりと平和に過ごす」が困難になると予想する。 その要因の一つとして、日本国内の高齢化である。退職後 にゆったり過ごすとなれば、年金の受け取りが必要になる が、高齢化によって年金が減少し、退職後も労働を強い られるようになる。現に、高年齢労働者は年々増加してお り、遠い未来の話ではなくなってきている。さらに、高齢に なるにつれ病気やケガのリスクも高くなり、万が一体を壊 し労働困難な状況になると、夢どころか生活すら危うくな る。また、労働できる体であっても、書類選考や様々な登 録などで、労働するためのステップがさらに複雑であるこ とは明確である。よって、「教職員になり退職後はゆったり 過ごす」という"妄想の世界"は、"未来"によって崩壊し"夢" は潰れ厳しい"現実の世界"を構成する。

このように潰れてしまうかもしれない夢ではあるが、私

は諦めた訳ではない。"未来"は避けて通れないが良いも のに変えることはできるからだ。第32代アメリカ合衆国大 統領のF・ルーズベルトは「美しい夢を信じる者に、未来 は開ける」という言葉を残している。つまり、夢を信じない もの、夢を持たないものには良い未来は訪れず、変えるこ とすらできないということだ。簡単に諦めようとせず、夢を 信じ続けその夢を持続していくことが重要であり、それが たとえ悪い結果に転じたとしても、夢を信じてきた過程の 中で得たものは新たな"夢"と"未来"を開くものになると考 えている。また、信じ続ける夢を現実のものに実現するた めには、一つ先の"未来"を予測していく必要もあると感じ る。目先に見えるその"夢"にはどのような"未来"が来るか、 どのようにして未来は開けるのかを十分考察することで "未来"を変える手段の引き出しが増えると考える。

"現実の世界"である未来は"夢"を潰すものであり、"妄 想の世界"である夢はその"未来"を変えることができる。 その違いと関係性を知ることで自分自身の夢へのモチ ベーション維持に繋げ、これから来るいかなる"未来"にも 対応できる力をつけていきたいと思う。自分の"夢"が"未 来"によって潰されないよう努力を怠らないことが重要だ と改めて感じられた。

工学部 電子情報通信工学科 谷 雄 —

私が取り組んでいるボランティア活動の未来と夢について書かせていただきます。

まず、皆さんは、2016年7月26日にある事件があったことを覚えておられますか? 罪もなく、大きな夢と未来が奪われた神奈川県相模原市の障害者施設殺傷事件の被害者の方々。私は、この事件を見て、人の生きる権利はすべて同じ、障害を持っていても持っていなくても、皆同じであると言うことを敢えて序文として書かせていただきます。

まず未来と夢について書く前に、私が行っているボランティア活動の内容と企画について少し説明します。私が行っているボランティアは、障害を持っている子供達と楽しく遊びながら種々の企画に取り組み、1日を過ごす活動を行っています。子供達は、色々な障害を持っています。活動は、毎月1回と夏休み15日程度です。そして、活動内容は、季節に応じた企画です。例えば、7月ならば七夕、10月であればハロウィンパーティーと言った企画を行っています。また、夏休みでは、水遊びやお祭り、地元大学との取り組みなどを行っています。ちなみに、私自身も企画を行っており、毎月1回の活動では、茶道を、夏休みの企画では、科学実験を行っています。それ以外に、ハロウィンパーティー企画にも参画し、大型の装飾品の制作を企画立案

しました。私自身が、企画する取り組みでは、毎年、参加している子供達、参加しているボランティアの皆さんにも大いに楽しんで貰い、また運営して頂いているお母さん方にも喜んで貰うような企画を考えました。



▲空気砲の実験



▲食塩水で虹を製作中



▲食塩水で作った虹

私のボランティア活動での夢は、もっと大きな企画を行いたいことです。私自身、色々な企画を行ってきましたが、特に科学実験で今までにない企画を行いたいと思っています。今までに行った実験では、家庭にある物を使った簡単な実験を行い子供達やボランティアの皆さんが大変喜んでくれました。しかし、家庭にある物を使った簡単な実験では、子供達は体験したことのない科学実験を行ったと言えるのかと疑問を抱きました。その観点から子供達が体験したことのない科学実験(例えば液体窒素を使った大掛かりな実験など)を行うことが夢なのです。また、巨大なピタゴラ装置をみんなで作る企画も行いたいです。

さらに、ボランティア活動の未来像として、今現在、活動は毎月1回と夏休みに15回程度なのですが、私が始めた時と比べて参加する子供の数が約半分に減り、夏休みの活動自体の存続が怪しくなってきています。将来的には、私たちが全て運営を行い、今まで準備や運営をして頂いていたお母さん方の負担をできる限り軽減し、子供達、さらには運営して頂いている全ての方が大いに喜んで貰い、心おきなく楽しい1日を過ごして頂くのが私の"未来"であり"夢"であります。



▲茶道企画でのお菓子作り1



▲茶道企画でのお菓子作り2



▲みんなで作ったピタゴラ装置



▲夏の風物詩 川遊び

山田 嘉徳 講師 全学教育機構高等教育センター

8年ほど前、文科省のある補助金事業の一環で、米 国サウスカロライナ大学に調査訪問の機会を頂いた ことがある。米国ではじまった初年次教育"First-Year Experience (FYE) "の運用とそのあり方について学ぶた めであった。本邦では今や9割を超える大学で導入され、 すでに当たり前の感のあるFYEだが、もとは高校から大 学に、そして大学から社会に、学生をうまく成功に導くた めの経験を接続(transition)させようとする意図が込め られた概念であった(ちなみにこの概念をめぐって恣意的 解釈から混乱が生じたり、意図が歪曲されたりしないよう に、FYEはすでに同大National Resource Centerに よって商標登録されている。本来「初年次経験教育」が適 切な表現で、便宜的に初年次教育となった経緯もある)。 このFYEプログラムの定着に関し、「20年かけてようやく 準備できた」との当センター長の言葉は、今でも印象深い 記憶としてある。目の前の実践から大胆かつ着実に改革 を進めてきた結果だという点が特に強調されていた。「未 来と夢」というお題からふと、このことを思い出した。

このような場を使わせて頂くのは恐縮ではあるが、「ア クティブ・ラーニング」にも少し触れたい。アクティブ・ラー ニングが注目されて久しいが、この導入をめぐり、着実に 議論と効果検討も進んできている。私も全国のアクティ ブ・ラーニングの効果検討調査に関わる機会にめぐまれ、 それを強く実感している。しかし一方、アクティブ・ラーニ ングにまつわる誤解とそれによる改革には難が多いとい うことも感じる。アクティブ・ラーニングはまずそれ自体 が行政用語であり、かつ傘概念で、能動性を喚起する学 習の仕方の総称である。だから「アクティブ・ラーニング をしている」という言い方はよく聞くのだが、それでは本来 意味が通らない。また専門性に立脚しない指導では、学 生を力強く牽引し、巻き込むことは至難で、アクティブさを 形づくる型や形式にのみ注力するというのでは、結局それ も定着をみない。そこで「深さ」の軸を見直すべきだという 提言が今、声として大きくなっている。現に初等中等教育 でも、前面にあったアクティブ・ラーニングという謳い文 句はむしろ後景に、かわって深い学びを打ち出すように変 わってきている。その流れの一環で、ディープ・アクティブ ラーニングといった言葉もでてきているのである。アクティ ブ・ラーニングも理念としてそれに至る理路を踏まえれ ば十分よいが、今日的な施策を冷静に眺めて、どこを強く 取り入れるのかの選択的な吟味が求められ、過去と現在 を分節化し、一定の戦略に基づいた地道な作業がそもそ も重要で必要だということを思い出したい。

個人の研究では最近、カナダケベック州で開催され た国際会議The International Society of Culturalhistorical Activity Research (ISCAR) に参加し、よい 経験ができた。ISCARは3年に1度開催される国際会議 で、いわゆる分野横断の学際的な会議だが、今大会は開 催から閉会まで4日間みっちり参加した。大会自体は2大 会ぶりで、イタリアローマで開催された2011年の発表の 際には、自身の論文でもよく引用している研究者と接触 し、話す機会が得られたが、内容の議論に乏しく、悔しい 思いもした。だから今回は、関心の強い異学年交流の学 習環境デザインに特化した議論をテーマに適った文化的 な教育実践に触れて行うという目標を持って、とりわけメ キシコ、韓国、チリ、ロシアのそれぞれの研究グループと交 流を持ち、アプローチや切り口にテーマ性を持った突っ込 んだ議論も一定程度できた。ただ細かなところでやはり不 十分で、課題も多々見つかったので次回の2020年のブラ ジル大会に向け、それまでに学会誌投稿をにらんで準備 を進めたい。それが目下の目標である。

最後に目の前の教育に関していえば、私自身は今年度 2つの取組を試行した。一つは演習でのベースグループを 用いたジグソー学習法の実践である。協同学習の理念を 背景に、グループづくりと課題選定に気をつければ、一定 程度うまく機能し、成長につながることを肌感覚では実感 しているので、こんどは検証が必要だ。また自分自身の教 授技法も未熟なので、外部のFDを使って宿泊型の研修 に参加したりして研鑽の機会をつくるようにした。私達は 学生がいつ、興味のまなざしをもって授業に積極的にの ぞむようになるのかを知っている。教員も日々向上し、授 業やプログラムをより良いにものにしたいとのぞまなけれ ば、学生をアクティブな学びに誘えない。今ある実践を大 切にし、前に進んでいくことで、目の前の具体の実践の延 長としての、今は未だ示し難いが確かに捉え得る「未来と 夢」を見出せる。そういうことを伝えていきたい。

学会企画事業

BRIDGESTONE





関西国際空港見学会に参加して

嶋田萌

頭の先からつま先までビニールのキャップや靴のカ バーにつつまれ白衣に着替えた時に、いよいよ中に入るの だと胸の高鳴りを覚えた。いざ工場の中へと思いきやロー ラー掛けや手洗い、エアシャワーを通り、工場内への髪の 毛などの異物を持ち込ませない管理が徹底されていた。

白衣を着ていても工場の中へ入ると冷やっとしていた。 工場内の温度管理は15℃以下に設定されており、空調 設備は直接冷風が当たらないように工夫されていた。食 品の表面温度も測定しサラダなどは15℃以下に保たれ ていることを確認されていた。

火を使った調理をするホットキッチンでは75°C以上の 温度で加熱しその後、細菌の繁殖を防止するために5℃ 以下まで急激に冷やすとのお話だった。食品を取り扱う 場所であるため温度管理はもちろんのことなのだろうが、 機内食は完成してからすぐに食べるものではないことから 更に徹底した管理がされており、私もお弁当を作るときに 気を付けなければならないなと考えさせられた。

見学した工場は日本で唯一ハラール認定を受けてお り、ハラールの料理のみを調理するハラールキッチンが あった。調理されているスタッフさんやキッチン内、お皿に 至るまで全て緑になっていた。これらが、快適な空の旅は 全ての人にとって平等であるために為されていることと思 うと胸が熱くなった。日本でもハラールキッチンが増えれ ばいいなとも思った。

ハラールキッチンの近くには、飛行機の出発30分前ま でであれば、機内食の追加オーダーにも対応する部屋が あり、中でたくさんの数字や文字がおどっていた。

機内食工場では機内食を作るだけでなくブランケット や酒類など様々な備品も用意し、機内へ運ぶ。食器などの 機内用品は航空各社からの預かりものであり、航空社ご との決められた場所に収められていた。また、酒類は保税 品で税金がかかっておらず、税関の抜き打ち監査がある とのお話だった。1本でも数が足らなければ大事になるた め、数の管理の徹底がなされていた。

機内食体験では、写真のハンバーグと目玉焼きの乗っ

たプレートは前述のホットキッチンでの調理を終えたもの なのだと考えると何だか馴染みのあるもののように感じ、 嬉しかった。メニューの内容はボリュームもあり、デザート もついていて美味しかった。

その後の自由時間ではスカイミュージアムへ行き、フラ イトシミュレーターと航空管制シミュレーターを体験し た。星3つの評価中3つと成績が良かったため、嬉しかっ

次に、わくわく関空見学プランのバスツアーに参加し た。普段は入ることのできない航空保安区域に入り、バ スの車窓から、空港の広さに関するクイズやペットホテル に関する解説を楽しんだ。関西国際空港内にはKIXメガ ソーラーと呼ばれる計11.6MWの発電出力を持つ、太陽 光発電所が建設されており、バスの中から降りて近くで見 ることができた。そこは展望台になっており、飛行機の離 着陸も見られる様になっていた。貨物機は人を後ろに乗 せないため旅客機で目にすることのできる窓がないとの 解説があり飛行機一つをとっても様々な工夫や個性があ り面白いなと思った。

その後、りんくうプレミアムアウトレットへ向かい1時間 時間を過ごしてから帰宅の途についた。

今回の見学会で私は機内食という一つの物事に対して でも多くの人が動いていることを目にすることができた。 それらのことに対し関心を持ち、感謝できる人でありたい と思う。



(工学部 機械工学科)

鈴鹿安全運転研修

吉向 宏惠

私は夏休みに学会主催の鈴鹿安全運転研修に参加しました。1回生のときから参加していたので、今回で3回目になりました。

1日目は朝大学にて集合し、鈴鹿サーキット交通教育センターに向かいました。そして、着いてから向こうの指導員の方に教えていただきながら、普段の運転で気をつけなければならない車間距離や、急ブレーキの掛け方など教わりました。一番楽しかったのは、水で濡れている路面をサイドブレーキをかけて後輪を滑らせながら走る練習でした。普段の道路では、有り得ないカーブの道をサイドブレーキをかけ、わざと滑らすのはやると危ないので、実際できたことはとても楽しかったです。

安全運転研修が終わってからは、ホテルに向かいました。晩御飯は、ホテル内にあるバイキングレストランで、アイスクリームがあったり、お寿司があったりとバラエティーにとんだ多くの料理が並んでいました。沢山あるため、食べ過ぎてしまい、お腹いっぱいになりました。

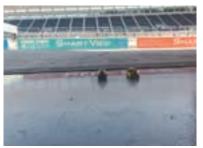
食事後は、ホテル内の温泉に向かい、体を癒しました。 ホテルのアメニティはすごく充実しているので、女性にとっ ては有難いです。また、泉質もとても良くお肌がスベスベに なりました。

翌日は、朝早くに起床し、歩いて鈴鹿サーキット交通教育センターの方に向かいました。歩いて向かう際に、開園前の遊園地内を通って向かいました。誰もいない遊園地は静かで、朝日の光が当たって綺麗でした。

鈴鹿サーキット交通教育センターに着くと車の点検を 簡単にしてから、サーキット場まで車を運転しました。前 日の運転とは違い、ヘルメットを装着してからの運転だっ たので、少し運転しづらかったです。サーキット場での走 行は、前の車に沿っての走行でした。1週目は80キロぐら いで走行し徐々に速度をあげ、最高速度が120キロぐら いまでいきました。計3周走り、走り終わった後はサーキット場での写真撮影を行いました。

サーキット場での写真撮影の後は、朝食を食べ、サーキット場内の施設見学に行きました。表彰台の上で写真

も撮れ、優勝カップまで持たせてもらったので、とても嬉しかったです。ピットガレージからは、走行会を行っている人の走行を見ました。自分達が走っていた速度とは全然違う速さで、とてもびっくりしました。



▲ピットガレージ



▲ピットレーン

見学の後は、鈴鹿サーキット内にある遊園地で遊びました。ゴーカートに初めて乗り、とても楽しかったです。最高速度は60キロで、体感速度は100キロに近いと言われました。実際に走行してみると地面が近く、とても早く感じました。最初走り出したときは、怖くてゆっくり走ってしまいましたが、徐々に速度をあげ、最高速度は50キロくらいまでいきました。また乗りたいと思いました。

お土産を園内で購入し、今回の鈴鹿安全運転研修は終了しました。帰りのバスは、遊び疲れたせいか、ほとんど寝ていました。

安全運転研修は毎年内容が少し変わるので、何年でも 行きたいと思ってしまいます。また来年も参加したいと思 います。

(デザイン工学部 情報システム学科)

羽田機体工場見学会に参加して

小西 秀弥

9/6~7 開催

僕は、羽田機体工場見学会に4回連続で参加をさせて いただきました。1回目は雨、2回目も雨、3回目も雨、そし て4回目となる今回も雨でした。引率の青山先生と「雨男 はどっちかな」なんて話を新幹線の中でしながら東京へ向 かいました。

1日目のメインイベントは、羽田空港沖のクルージング。 乗船場へ向かうと、いつもの添乗員さんと船長さんがお 出迎えしてくれました。乗船し、ウェルカムドリンクを飲み ながら羽田空港沖へ。僕は、航空無線を聴きながらカメラ 等、撮影の準備をしていました。

当日の滑走路運用は、A滑走路を着陸、D滑走路を 離陸、C滑走路を離着陸に使う運用でした。B滑走路に アプローチする機体を撮影したかったので、少し残念でし

D滑走路沖でのお楽しみは、世界で初の桟橋構造を採 用した滑走路を真横から眺められることです。多摩川の流 れを妨げる恐れがある部分のみを桟橋構造としているた め、3分の2は埋め立てで作られています。なので、ハイブ リッド滑走路とも呼ばれています。ですが、桟橋部分(滑 走路05)は、離陸滑走には耐えられるが、着陸には耐え られないそうです。下の写真1には、桟橋部分とANAの B787が写っています。



この日はD滑走路が離陸用滑走路として使われていた ので、国内、国際線を問わずひっきりなしに離陸していき ました。湿度が高かったので、主翼周りの空気が急減圧 されることで起こるヴェイパーを撮影することができまし

た。写真2の翼端から出ている線です。展望デッキからは 決して撮影することのできない写真を撮ることができて大 満足です。



クルーズを終え、ホテルへのチェックインを済ませた後 は自由行動です。少し休憩を取った後、高校の友人もたま たま東京に来ているということで、一緒に晩ご飯を食べる ことにしました。卒業以来、3年振りに会ったのですごく話 が弾みました。高校時代の話、大学での専攻や留学の話 など話題が尽きず、夕方から食べ始めたのに気付けば22 時になっていました。すごく楽しかったです。

2日目は、午前中に空港探索、昼過ぎから機体工場見 学という流れでした。空港探索の間、国際線ターミナルか らライン整備士の姿をずっと見ていました。大学卒業後 はANAのライン整備士として働かせていただくので、自分 が働いている姿を想像しながら眺めていました。何百人も のお客さんが搭乗している飛行機を自分一人で送り出せ るのかなど、不安になる部分もありましたが、やはり自分





▲写真4

が航空整備士として働ける喜びのほうが大きかったです。 ライン整備士は、飛行機が到着して再度出発するまでに、 機体のあらゆるところを点検し、不具合が見つかれば修 理を行います。気付けば、整備士と飛行機ばかりを撮って いました。(写真3、4)

午後からは、待ちに待った機体工場見学です。新整備場駅から歩いて向かいました。途中には、ドラマGOOD LUCKの撮影をしたところを通ったりして、道中も楽しめました。自分が働く会社の横の建物に入り、格納庫や飛行機の説明を聞きました。少し休憩を挟み、格納庫へ。

格納庫には、B787-8、-9、A320neo、B767-300 がいました。787-8はエンジンがはずされ、カバーがされていました。787は機体のおよそ半分に炭素繊維が使われている最新鋭の飛行機です。炭素繊維を使用することで、軽量化され、中型機としては長い距離を飛行することが可能です。(写真5)



▲写真5

全体を眺めた後は下へ降り、間近で飛行機を見ることができました。飛行機を間近で見られるのはもちろん嬉しかったのですが、個人的に一番嬉しかったのは、787用のエンジンである、ロールスロイス社製のトレント1000が置いてあったことです。エンジンの中身を見られるのは滅多に無いことなので、案内係の方の話そっちのけで見入っていました。(写真6)また、ノーズギアやピトー管も間近で

見ることができました。(写真7)



▲写真6



▲写真7

来年からANAの整備士として働くということもあり、今回の見学会は今までと違うものになりました。機体のそばへ行く前に、工具置き場がありました。整備士は一人ひとりに自分専用の工具箱を渡され、中に入っている工具には全て名前が入れられています。その工具置き場に自分の工具が並ぶこと、その工具でこれから何機も整備することなど、様々なことが頭の中をめぐりました。責任は重いですが、整備士という飛行機の運航に直接関わることができる仕事に就けることを誇りに思います。今回の見学会を通して、より一層頑張らなければいけないなと感じました。

(工学部 交通機械工学科)

東京証券取引所と各種メディア見学会

李 懷玲·LUO CAN

これまで私たちは学会主催のいくつかの見学会に参加 しているんなことを楽しく学ぶことができましたので、今回 の東京証券取引所と各種メディアの見学会も申し込む前 からとても楽しみにしていました。

9月7日朝9時10分に新大阪駅の千成瓢箪前で集合 だったのですが、私たちが到着した9時前には先生も他 の学生の多くもすでに集まっていました。みんなも楽しみ にしていたのでしょう。東京まで新幹線の旅です。日本へ 来て初めての新幹線です。その速さだけでなくきれいなこ とにも感動しました。東京までの時間は長いので、先生が 用意していた日本や世界の時事問題105問に挑戦しまし た。留学生なので、日本のことは知らないことが多かった のですが、同時に配ってもらった解説を見ているいる勉強 になりました。新幹線での時間は無駄にされなくてよかっ たと思います。東京に着く時間は12時13分なので、昼ご 飯は新幹線の中で配られたお弁当を食べました。お弁当 のおかずが多く、栄養豊富なうえにおいしくいただきまし た。友達と一緒にお弁当を食べながら話しているうちに、 あっという間に東京駅に着きました。

東京に到着した時は雨でした。それでもみんなは笑顔 いっぱいで最初の見学先のテレビ朝日と東京ミッドタウ ンのある六本木に地下鉄を乗り継いで向かいました。こ の見学会に参加した学生は20人でしたが、同じ地下鉄の 車両に20人同時に乗って同じ駅に降りるなんて、みんな 間違いなく降りられるのか心配になりました。テレビ朝日 の見学は人数制限があるので、六本木の駅で参加者は二 班に分かれました。私たちはA班なので、先にテレビ朝日 を見学してから、東京ミッドタウンの自由見学となります。 テレビ朝日にはちょっと早く着いたので、テレビ朝日の看 板番組のセットや等身大の人形のところでいっぱい写真 を撮りました。普段よく見ている番組、例えば、徹子の部 屋とかmusic stationとか、それに子供時代から見てい るドラえもんやクレヨンしんちゃんなどがあって、懐かしい なって言いながら興奮していました。

13時30分からテレビ朝日のいろんな施設をテレビ



▲TV朝日1

朝日の女性社員に案内していただきました。まずは緊急 ニュースを報道するスタジオとその横にあるスタッフルー ムを、そのあと報道ステーションで使われているスタジオ です。スタジオの準備をしているスタッフのナマの姿を見 ながらの見学です。スタジオの天井には照明が200以上 もあることを初めて知りました。また報道ステーションで 使われているスタジオの花や木は本物の生きている植物 で、すべて週替わりで花屋さんが入れ替えをしていると聞 いて、びっくりしました。番組を作るスタッフの努力が伝 わってきて、テレビ朝日の番組を見るのが楽しみになりま した。さらに報道ステーションのスタジオの番組で実際に 使われている椅子に座らせていただき、記念写真を撮っ てもらいました。普段テレビで見慣れている番組のスタジ オを実際に目の前にすると、そこに番組出演者がリアルに いるように感じました。スタジオ見学のあとは、さまざまな 番組を支えているいろんな部門を見せてもらいました。ド ラマや番組で使われている道具は本物のように見えます



▲TV朝日2

が、レンガや石や大型の魚などは発泡スチロールで作られていてとても軽いものでした。また、水泳の競技などで水面に名前や国旗などをテレビ画面に映す技術はテレビ朝日が作ったとのことで、テレビ朝日の技術力の高さを知りました。テレビ朝日の見学の途中、石坂浩二さんの実物とすれ違いました。5、6人の人からインタビューされながら狭い廊下を歩いて行かれました。このように、実際に動いているテレビ局を見ることができて感激しました。見学が終わったあと、素敵な見学記念の土産もいただきました。個人的にはテレビ朝日の土産もの屋さんでドラえもんがついているどら焼きを買いました。



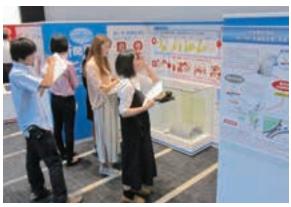
▲TV朝日3

テレビ朝日の見学後は東京ミッドタウンでの自由時間です。雨が降り続いていたので、見学はあきらめて、抹茶を飲みながら友達と話しました。一日目の見学が終わって、茅場町のホテルにチェックインしました。夜の時間は自由だったので、友達と一緒に新宿へ行きました。新宿の街を歩いて、東京の明るい夜を満喫しました。東京は高層ビルが本当に多く、しかも、外国人も多いのです。夜の新宿駅は、急いで歩いている人もいるし、のんびりと街で会話する人もいます。こんな東京を見るだけでも一つの観光になります。JR新宿駅の歩道橋からはNTTドコモのビルが見えます。そこはアニメの『君の名は』に出てくるスポットとして有名な場所です。プランを立てていなかったのにこんな有名な場所を見つけて、ラッキーでした。雨だったので、紫っぽく見えたNTTのビルは幻のようでした。歩道橋から

下を見ると、自動車の車燈が薄く赤く光っていて、大都会が息を吐いているようでした。友達と一緒にいっぱい写真を撮りました。夕飯は新宿でいろいろと探したのですが、結局は東京名物の油そばを食べました。とてもおいしかったです。大阪で油そばを食べたことがありますが、東京の油そばは大阪のものより油が少なく、調味料も酢だけでなくマヨネーズも出してくれました。同じ油そばなのに、東京と大阪は違うのです。

二日目は天気に恵まれ、快晴でした。二日目は読売新聞での模擬記者会見と東京証券取引所での株式の模擬売買が予定に入っているので、すごく楽しみにしていました。

まずはホテルの近くから地下鉄に乗って読売新聞に行きました。実際に新聞の記事を作っている社員が働いているオフィスに行きました。読売新聞社は社会部、政治部、経済部、編成部、校閲部と写真部の六つからなっています。オフィスはものすごく大きく、部署と部署の間は柱や壁などの隔てるものがなく一体となっていて、部署間の交流が容易にできる構造になっています。新聞の毎日の編集会議は大きなオープンスペースで行われるのです。編集会議には用意されている椅子の数以上の人が参加することが多く、かなりの人は立ったままで会議に参加するとのことです。編集会議には各地の社員もテレビ会議の形で参加します。この編集会議のオープンスペースを吹き抜けスペースの上の方から見学させてもらったのですが、実際の会議が目に浮かんでくるようでした。白い壁には、5メートルごとに時計が見やすいところに設置されています。新



▲読売2



▲読売3

聞記者の仕事が時間との勝負であることが分かります。 新聞紙のレイアウトについても教えてもらいました。新聞 紙の右上がアタマで、いちばん重要なニュースが載せられ ています。左上がカタで、二番目に重要なニュースが載せ られています。

読売新聞社の心臓部とも言える広大なオフィスの見学 後、新聞についてのいくつかの問題が配られました。問題 の解答は新聞の歴史や印刷工程などの展示の中に隠さ れているので、楽しみながらも真剣に解答を探しました。 次に模擬記者会見が行われました。警察署長役の人から 事件の概要を聞いたあと、渡された記事の素案をさらに 新聞の記事らしくするために事件の重要なポイントを警 察署長の人に質問するのです。質問にあたっては「××新 聞の○○です」からはじめます。私たちは積極的に質問を して記事を完成させ、完成させた記事の載った新聞をい ただきました。最後に新聞記者による原稿集めから始まっ て、原稿を本社に電送し、本社で編集会議を行い、記事と 新聞紙上の記事のレイアウトを確定し、全国の印刷所に 電送し、印刷所で印刷したものを配達店にトラックで運搬



し、配達員が各家庭に朝5時頃には配達するというビデ オを見せてもらいました。新聞が家に届くまでには、記者、 デスク、印刷作業員、運送・配達員などの多くの人が携 わっていることを学びました。

昼食は東京駅八重洲口の大丸の12階で大学が予約し たバイキング方式のレストランで食べたのですが、品数が 多くて、蟹まで食べることができました。食事を満喫しな がら高いところから東京の街を見られて、とても楽しかっ

二日目の午後はいよいよ東京証券取引所の見学です。 見学専用入り口は長蛇の列です。持ち物の中身をチェッ クされ、X線検査装置をくぐらせ、私たちは金属探知機を くぐってようやく中に入れました。さすが、日本の経済の心 臓部だと身が引き締まりました。見学者や勉強会の参加 者が多かったので少し待って2階に上がりました。ビデオ で証券取引所の歴史とその役割を学びました。東京株式 取引所の創立から、東京証券取引所と大阪証券取引所 の経営統合による「JPX(日本取引所グループ)」になった 話。流通市場の開設、運営、取引の精算、決済、記録を集 中的に処理するなどの取引所の役割について知ることが できました。



▲東証1

ビデオのあと、写真や経済ニュース番組で見たことの あるマーケットセンターを見学しました。クルクル回る電 光掲示のチッカーがどんどん新しい株価を表示していき ます。会社が新しく上場するときなどに記念としてたたく 鐘もありました。最後は、楽しみにしていた株式の模擬売



▲東証2



▲東証3

買です。自動車会社、銀行、ガス会社の3社の株を次々に表示される為替や世界の景気情報をもとに売買するのです。1千万円の元手で30分程度でお金を増やすゲームです。私たち2人のうち一人は40万円儲けたのですが、もう一人は90万円も損をしました。いちばんお金を増やした人は250万円も増やしていました。残念ながら私たちの大学の人ではなく、他の大学の人でした。株式の売買で成功するためには、もっと経済と経営の関係を勉強しないといけないと思いました。けれど、この見学で、証券取引所の世界の経済における重要な役割について学ぶことができてよかったです。

今回の東京証券取引所と各種メディアの見学会では、本当に多くのことを勉強できました。普段体験できないことも体験できて、楽しかったです。そして、引率の先生がたもいろいると助けてくださって、本当に感謝しています。また、二日間という短い旅行でしたが、一緒に行った他の学部の学生の友達もできて、すごくうれしいです。これからもチャンスがあれば、学会が企画する他の見学会にも、また参加したいと思います。

(経済学部 経済学科)

和菓子作り体験会に参加して

柏木 苑代

今回、大阪産業大学学会のご厚意により和菓子作り 体験に参加させて頂くことが出来ました。滋賀県にあるお 店、叶 匠壽庵の方々の指導のもと、和菓子作りを始めお 茶菓子や太鼓の演奏会の見学なども参加させて頂きまし た。

最初に日本古来の雰囲気が溢れる建物に案内され叶 匠壽庵の和菓子を試食させて頂きました。私自身、今回 初めて食べたのは「あも」という小豆で包まれた和菓子で す。食べてみると中に白いお餅とほんのり柚子味。小豆も さっぱりしており思わず熱いお茶と一緒に食べたくなる 美味しさでした。お話しをお伺いすると季節により味が変 わるそうです。

お届もお弁当箱の中には素材の味を活かした、おせち のような色鮮やかな食材が並べてあり味も薄味だがとて も美味しい。普段はジャンクフードや揚げ物に慣れている せいか物足りなさを感じつつも、日本の食文化を体験し 日本食の良さを改めて実感することが出来ました。

午後から和菓子作り体験が始まり、叶 匠壽庵の方の 指導のもと、秋をイメージした和菓子を一つ一つ手作りし ていきました。霜降、イチョウなど各々の和菓子にテーマ があり、形を作っていくのですがこれが意外と難しい。職 人の方はいとも簡単に作るが、いざやってみると思い通り に生地がつかないのです。隣同士教え合い確認しながら 一つ一つ作っていく。私自身、お菓子が生地から完成に近 づけば近づくほど気分が盛り上がり4つ全て完成した時 には、日本の和菓子、また手作りのものってとても繊細な ものなのだと実感することが出来ました。

その後に写真の和室に通されお茶も体験させて頂きま した。とても趣深い雰囲気漂う部屋で写真では窓から見 える木々は緑色ですが数日で紅葉がとても美しくなるそ うです。実は私は抹茶が苦手なのですが、その場で入れて 頂いたものを恐々飲んでみると、後味に苦みが少なく美味 しく頂くことが出来ました。

そしてお土産を買い、叶 匠壽庵を後にし全員で彦根城 の見学に行きました。時間に限りがあり天守閣までは行く

ことが出来ませんでしたがお城のすぐ側まで行き庭園も 見ることが出来、無事その日の見学会を終えました。

日本文化に触れる機会が少なくなってきた昨今の中 で、今回のような企画に参加させて頂き、日本の食や文化 について、たくさん触れることが出来ました。「和菓子って 普段からあんまり食べないよね。」から、「また作ってみた い。"あも"のような地域の名産品の和菓子が他にもある ならもっと知ってみたい。」そう思うことが出来ました。短 い時間でしたが本当に素敵な経験をさせて頂くことが出 来ました。機会をくださった学会の方たちをはじめ、叶 匠 壽庵の方々、そして教授の皆様、ガイドさんや運転手の 方、今回一緒に参加した方々へ改めて御礼申し上げます。 ありがとうございました。





(人間環境学部 生活環境学科)

全国美術館巡り(富山)

淺野 洋斗

11月5日(日)から6日(月)にかけて富山県で過ごした1 泊2日は、大学のある大阪で過ごす日々とは異なる環境で 時間を過ごしたということもあり、非常に有意義な時間を 過ごすことができました。私は建築・環境デザイン学科に 籍を置いており、普段は工業デザインについて学んでいる ため、そのような視点からこの見学会感想文を書かせて いただきます。

まず、訪れた富山県について。あたりまえのことではあり ますが、普段過ごす大阪と富山では、気温や目に映る景 色、吹く風の匂いに至るまで、環境と呼ばれるものが異な ります。また、その環境で暮らす街の人々もまた大阪の人 達とは違うように感じました。街を歩いていても関西弁が 耳に入ることはありません。私は国内旅行が趣味で、様々 な都道府県に足を運ぶのですが、そのたびに同じ日本で もこのような人や暮らしの違いがあるのか、と驚かされま す。そして、人や環境が違えば、それがモノのカタチとなっ て現れてきます。信号機は雪による荷重に耐えられるよう にライトが縦に配置されるなど、他にも様々な環境に寄り 添ったカタチを目にすることができました。このような体 験は、自分で足を運んで実際に目にしなければ気づくこと ができないこともあります。そのため、工芸体験や美術館 の見学以外にも、この見学会には普段と異なる環境に触 れるという楽しみがありました。

吹きガラス体験では、伝統工芸に触れるという機会があまりなかった私にとっては、刺激の連続でした。普段は学校で図面を引き、3Dソフトでモデルを考える私達にとっては、実際にモノが技術の上に形作られる様を見ることはあまりありませんでした。ガラスが目の前で自由に形を変えてゆく様を見るのは大変面白く、学芸員の方と共に作ってゆく体験は非常に価値のあるものでした。改めて、モノをつくる、考えるということの面白さを知ることができ

たような、そんな気持ちになりました。

富山ガラス美術館では、そんなガラス体験をした後であったので、より一層ガラスに対して興味を持って見学に臨むことができました。もともと、工業デザインにおいてもガラスはよく使用される素材であるため、作品に対する興味はあったのですが、展示されている作品達が見せる表情は、非常に多様性に富んでおり、ガラスという素材一つとっても作り手の技術や思想によってここまで姿を変えるのか、と驚いたのを覚えています。美術館自体も熊健吾氏の作品とあって、各階の吹き抜け部分を変化させることにより生まれる空間と、それによる視線の通りの操作は圧巻でした。

最後に富山県立美術館について。ここでは世界的に著名な椅子等がコレクションされていましたが、私はモーションキャプチャーした腕の動きの軌跡を視覚化するものや、オノマトペの広場の遊具など、来館した人達が楽しみながらアートに触れることができる作品に目を惹かれました。特に、オノマトペの広場では、子供だけではなく大人も一緒になって作品に触れ、楽しんでいたのを覚えています。アートと触れるという行為は、必ずしも限られた高尚な人間のものではなく、多くの人に開かれた感じることの楽しみなのだと実感しました。

学校の友人や先生と巡ったこの1泊2日は本当に有意義なものでした。一人で知らない場所に出かけるのも好きですが、今回のように気心の知れた仲間達と共に時間を過ごすという体験はまた違った楽しみがあると思います。そんな仲間達と思い出を作ることができるのも、この見学会の醍醐味の一つであると思います。

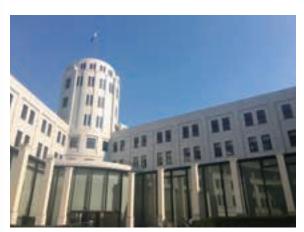
(デザイン工学部 建築環境デザイン学科)

神戸港の各種施設見学会に参加して

城戸 真貴

私は今回初めて神戸税関にいきましたが、建物の大き さときれいさに驚きました。私が想像していた税関の建物 とは大きく異なりました。神戸港は全国でも屈指の貿易 の量が多い港で、それに比例して密輸入も多くなるので 玄関口である税関の役割は大変重要になってくることと 思います。日本は食料やエネルギーの自給率が低いので、 輸入に頼っているのが現状です。安心安全に輸入された ものが私たちの手元に来るのは税関のおかげだと強く思 いました。拳銃や覚醒剤、大麻などの薬物の密輸はニュー スや新聞で見たり聞いたりしますが、本当にあるのかとい う感じでした。見本で置いてあった、木の箱に覚醒剤が隠 してあったり、船のエンジン室に隠してあったり、鉄鉱石 を細工し隠したりと密輸入をしようとする人はばれないよ うに様々な手段を考えていて、それを見つけるのは大変な ことだと思いました。中でも一番驚いたのがシジミの袋の 中に隠してあったことです。においもきつく、大変だったと おっしゃっていました。他にも、動物のはく製や、ブランド 物の海賊版やコピー商品も多く、本物そっくりに作られて いるため見分けるのが難しいと思いました。

神戸税関はとても長い歴史があります。税関職員の制



服の変遷というコーナーがあったのですが、昭和、平成は 男性と女性の模型がありました。しかし、それ以前は男性 の模型しかなく、日本の女性は家を守るという時代背景 が見えました。他にも、違う国のお金や、アメリカ人が落書 きしたという、落書きとは思えない上手な絵を描いた壁の 写真など、とても興味深かったです。

神戸港ベイクルーズでは、潜水艦を見ることができまし た。私自身、初めて潜水艦を見たのですが大きさに驚きま した。アニメや本で見た通り真っ黒で、想像していた通り でした。港はとても大きく、川崎重工、三菱重工、神戸大橋 を見ることができました。

上組のコンテナターミナルでは、間近でコンテナを見る ことができました。ガントリークレーンが動いているところ は見ることができませんでしたが、トランスファークレーン が動いているところは見ることができました。船がとまって いるところも見たかったです。しかし、写真でしか見たこと がなかったクレーンや、コンテナが運ばれているところを 見ることができ、大変貴重な経験となりました。

(経営学部 商学科)



陶芸作り体験会に参加して

宇都宮 童夢

学会主催の陶芸体験に参加してきました。学会主催のイベントに参加するのは3回目です。陶芸は1度やってみたかったので、友人を誘って参加しました。参加者は20名ほど、おりました。バスで揺られること2時間、篠山市にある陶の郷に到着しました。到着して周りの景色を見たら山や自然がいっぱいでした。その日は快晴で非常にポカポカして気分が良かったです。(写真1)

その後、食堂に向かい昼食を食べました。昼食がまさかの焼肉だったのでとても驚きました。もう満足になりました。(写真2)



▲写真1



▲写真2

昼食を食べ終えてしばらくして、陶芸教室に向かいました。そこで、講師の方に陶芸体験についての説明を聞きました。手本を作ってもらいながら、作り方の説明を聞いたので分かりやすかったです。何を作るか決めてから作業に

入りました。私は、湯呑みを作ることにしました。初めの工程は、土台を作るところから始まります。好きな大きさの粘土を厚さ1cmになるまで伸ばしたら土台の完成です。次の工程は、2cmほどの太さのひもを作り土台の上に1段積み、継ぎ目を指で消す。それを繰り返すことで、外側を作ります。この工程がとても難しかったです。2段目3段目と重ねていくうちにバランスがおかしくなって形が変になり、限界を感じた私は、講師の方にアドバイスをもらいながら手伝ってもらいました。

それから私なりに工夫をして、無事に完成することが出来ました。私の作品は1枚目の手前のもので、シンプルな湯呑みに仕上がりました。(写真3)



▲写真3

私の向かい側にいた学会の職員さんを見たら、見た目がなめらかで、きれいだったのであれ程に作れたらいいな

と思いました。右の写 真は皆さんの完成品 ですが、どれも素晴 らしく出来ており、中 にはネコが乗ったも のもあったので手が 凝っていて、びっくり

しました。(写真4)



▲写真4

陶芸体験を終えたあとは自由時間を使って色んな施設 を見てきました。陶の郷は陶芸体験だけでなく、計55軒 の丹波焼などを販売している窯元横丁や、丹波焼の名品 を展示している伝産会館を見てきました。中には、両手を 伸ばすのと同じくらいのお皿や歴史の古いものなど様々 な作品が飾っていました。

ある程度見学しても時間が余ったので、お土産を見ま した。ここの特産品は黒豆で粒が丸くて大きいのが特徴 で口にいれた食感はモッチリとしており美味らしいです。 食べておけば良かったと後悔です。

帰る前に皆さんで写真を撮りました。皆さんと並んでか ら今日来た人数って多かったのだなと改めて思いました。 思った以上に、今回の陶芸体験を楽しめました。完成品 が届くのが1、2月辺りなので、それまで楽しみにしていま す。

(デザイン工学部 情報システム学科)

コンテスト報告・優秀作品



平成29年度 写真・イラストコンテスト(イラスト部門)金賞受賞作品 『ビル群』

大垣 実(デザイン工学部 情報システム学科)

コンテスト報告

第18回「ぶんかくコンテスト」 第2回「写真・イラストコンテスト」

(写真部門/イラスト部門)

大阪産業大学学会では、例年、学部生・大学院生を対象に学内コンテストを実施してきました。今年度からコンテスト名 称を、「大阪産業大学学会コンテスト」と改め、内容も一部変更して実施しました。

ぶんかくコンテストでは、小説・体験・ショートショートを募集しました。今回、小説の応募はありませんでしたが、ショー トショートにはたくさんの応募があり、また、体験ではインターンシップ参加者からの応募がありました。

写真・イラストコンテストでは、学内にこだわらず風景写真を募集し、様々な写真の応募がありました。イラスト部門では、 手書きで作成されたものや、パソコンを用いて作成されたものなど、多様な作品の応募がありました。

また、今年度はあいであコンテストに代わり、「見学会プランニングコンテスト」を実施しました。優秀なプランは次年度の 学会主催の見学会として開催する予定です。

応募方法や審査方法など、改善すべき点もありましたが、次年度以降も学生がより興味をひくよう工夫を凝らしながら、 継続していきたいと思います。



▲2017年度学会コンテストチラシ

各コンテスト実施結果

第18回 ぶんかくコンテスト実施結果

募集期間 2017年7月10日(月) ~ 2017年9月29日(金)

募集内容 体験・小説・ショートショート

書類審査 審査

2017年10月11日(水)

最終審査

2017年10月17日(火)

体験…………1件 応募件数

ショートショート…11件

〈受賞者一覧〉

【優秀賞】

藪田 学(人間環境学部 スポーツ健康学科)

作品: デンマーク オレロップ体育アカデミーでの留学体験

【奨励賞】

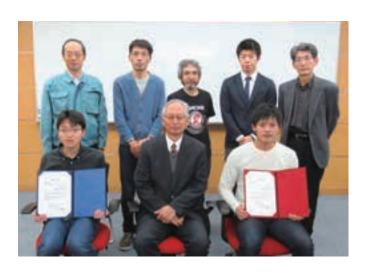
東野 博之(デザイン工学部 環境理工学科)

作品:幸福な仕事

【努力賞】

山崎 遼(経済学部 経済学科)

作品:朝焼けの恋文



〈審査委員〉

中原翔、東良徳一、宮田実、齋藤立滋、中村茂裕、田口まゆみ、ダニエル・テューバー、酒井博章、信吉史明、 韓福相、李澤建、本田雅子

(順不同、敬称略)

第2回 写真・イラストコンテスト実施結果

募集期間 2017年7月10日(月) ~ 2017年9月29日(金)

募集内容 写真部門………風景写真

イラストデザイン部門…デッサン、イラスト、学会見学会のキャラクターデザイン、4コマ漫画、風刺画

審査 書類審査

2017年10月11日(水)

最終審査

2017年10月17日(火)

写真部門……7件 応募件数

イラストデザイン部門…5件

〈受賞者一覧〉

[写真部門]

優秀賞、奨励賞、努力賞・・・該当なし

【金賞】

嶋田 萌(工学部 機械工学科)

作品:光

【銀賞】

吉向 宏恵(デザイン工学部 情報システム学科)

作品:夕焼けに包まれる学内

【銅賞】

丸野 大樹(工学部 交通機械工学科)

作品:将来

【銅賞】

杉原 凌(経済学部 経済学科)

作品:経済のささえ



[イラストデザイン部門]

優秀賞、奨励賞、努力賞…該当なし

【金賞】

大垣 実(デザイン工学部 情報システム学科)

作品:ビル群

【銀賞】

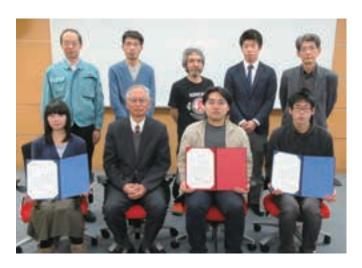
坂井 駿斗(デザイン工学部 情報システム学科)

作品:技術の沼

【銅賞】

重村 妃南(経済学部)

作品:明日の私



〈審査委員〉

青山一樹、大垣斉、大津山澄明、田中讓、横井豊彦、奥哲治、花田眞理子、塚本直幸、大橋美奈子、尾崎博明、 鈴木晶雄、藤原一朗

(順不同、敬称略)

平成29年度 学会コンテスト表彰式

開催日 2017年12月5日(火)



第18回「ぶんかくコンテスト」(体験部門)

デンマーク オレロップ体育アカデミーでの留学体験

人間環境学部 スポーツ健康学科 藪田 学

私は2016年から1年間、デンマークのオレロップ体育 アカデミーに留学し、素晴らしい体験とたくさんの友達が 出来ました。この貴重な体験の一部を報告いたします。

1. オレロップ体育アカデミーへの留学

オレロップ体育アカデミー (Gymnastic højskolen i Ollerup)は、ラジオ体操の原形の動きを持つデンマーク 体操を日本に紹介した、ニールス・ブックが創設したフォ ルケホイスコーレ(国民高等学校)です。この学校は、リズ ム体操、パルクール、ダンス、タンブリング、集団体操など の様々なコースが用意され、誰でも参加出来る成人を対 象とした学校です。ここを知ったきっかけは、二つありま す。一つは、この学校のエリートチームが平成22年に来日 し、その演技発表を本学のWelness2008アリーナで観 たことです。母が小学生だった私を連れて観覧したのです が、チームの演技に「こんな体操があるのだ」と驚かされま した。もう一つは、姉がこの学校に留学し、留学中に電話 やメールでのやり取りで、「楽しい」や「良い経験が出来る」 などの話を聞いたことです。

姉が帰国してからも色々な話を聞いたことや、パルクー ルも教えてくれるということを知り、どんどん興味を抱くよ うになり、私も行くことを決意しました。そこから留学先へ の申し込み手続き、パスポートやビザの取得、飛行機の予 約、留学先までの行く方法など初めてのことばかりで大変 だったけれど自分で行くと決めたことなので、苦ではあり ませんでした。親や姉にも「あんたには無理ちゃう?」と反 対されましたが私の決意は固く、両親の許可を得て行くこ とが出来ました。

パルクール(Le parcours)は、ジョルジュ・エベルに よって提案された古典的な障害物コース形式の兵士ト レーニングに由来し、障害物を乗り越えたり素早く移動し たりする運動の中に、登ること・走ること・跳ぶこと・バ ランスをとることといった要素を含んだスポーツです。街 中にある建物や壁などを使って行われることが多い新し いスポーツです。私がこのスポーツに惹かれたのは、生活 やスポーツに必要なすべての能力を鍛えられて、動きを 規定するルールもなく、他人との競技ではなく自主的な 運動として実践されるという特性に惹かれたからです。

2. オレロップに着くまで

さて、私が飛行機に乗った経験は中学と高校の修学旅 行(国内)だけで、全く初めての国際線の搭乗でした。成 田国際空港では右も左もわからない状態だったのですが 何とか搭乗手続きをし、飛行機に乗ることが出来ました。 香港で乗り換えの時、職員に止められて驚きましたが、何 事もなく通ることが出来ホッと一安心しました。デンマー クのコペンハーゲンに着くまではスムーズでしたが、そこ から電車に乗継ぐのですが一苦労でした。言葉が通じず 迷子になって空港をうろうろし、やっと切符売り場を見つ け留学先の学校まで切符を買い、電車の場所を教えても らい電車に乗りました。しかし、今度は降りる駅がわから なく困っていたら、同乗のデンマークの人が「どこに行く の?」と尋ねてくれ、行き方を教えてくれました。あの人が いなかったら私はわけもわからない所に行っていたはず です。電車は無事に最寄り駅に付き、バスに乗り換えまし た。しかし、バスでも降りる停留所がわからず、寝ずにずっ と外の景色を見ていました。Ollerupという名前を頼り にようやくOllerupの付く停留所があったので下りました が、手前で降りてしまいました。Ollerupと名付けられた 停留所はいくつもあったためです。それで、1時間ほど待っ て次のバスに乗り、やっと到着しました。

学校についても受付場所がどこかわからず、迷いまし た。オレロップでは、留学の手続き等の窓口をしてくれて いる日本人職員(以下、ヒデさん)が待ってくれていました が、ヒデさんの家もわからなく探していると、デンマーク人 の夫婦が手続きのことを教えてくれました。ようやく部屋 の鍵を貰い、自分の部屋に荷物を置いて学校を探検しま した。探検中にカナダから来た留学生に出会いました。自 己紹介をしようと思いましたが英語は喋れないし、緊張し て何も言えませんでした。すると、あちらが気を使ってくれ て自己紹介をしてくれました。質問もしてくれましたが、英語がほとんど聞き取れないので、とにかく知っている単語を発したら彼はすごく困った表情をしていました。それでも彼には食事の時間やこれからの予定を教えてもらい、何とか理解出来ました。夕食後、学校の前にあるヒデさんの家に日本人留学生6人が集まり、日本人会をしました。お茶を飲みながらの談話はあっという間に過ぎて、日本語の有難さが身に沁みました。

3. オレロップでの生活

(1)授業

翌日には入学式があり、デンマーク人だけでなく世界各国から来た留学生(インターナショナルコース、以下インターナショナル)を発見しました。学校の寮は全寮制の2人部屋で、ルームメイトはデンマーク人でした。いよいよデンマーク生活がスタートし、翌日から授業にワクワクと期待しながら眠ってしまいました。

一日の生活は、全員食堂で朝食をとった後、施設の掃除を行います。それから授業が始まります。授業はだいたい午前中2コマ、午後2コマで、午前、午後ともに授業の間は食堂の前のテラスで水分補給や果物、ケーキなどの間食をとることが出来ます。

授業はデンマーク人だけのクラスとインターナショナルのクラスに別れています。インターナショナルコースは英語で授業が行われます。私の初めての授業はインターナショナル同士の自己紹介とみんなでゲームをして遊びました。自己紹介では緊張して自分が何を言っているかわからないくらい混乱していました。ゲームは宝探しや鬼ごっこなどをし、みんなとのコミュニケーションを高めました。

授業の進め方は主に話し合いで課題を決めて、その解決策について議論を進める形式で行われます。決して、先生がこれをしなさいとかやれといった形式はとっていませんでした。インターナショナルの人達は自分の意見を持っていてどんどん自分の考えを発表していました。日本ではあまり意見が出ず議論自体が成り立っていないことがよくありますが、デンマークでは活発に発言があり、結果が出ても満足せず、さらにこうしたらいいなどの意見がたくさ

ん出ていました。私は話に英語力の足らなさから聞いているだけでしたが、皆の話し合いを眺めていると、日本の人達もどんどん意見を言い自己主張をすればいいのにと思いました。

他の授業はデンマーク語や文化の授業とスポーツの 授業でした。デンマーク語の授業は初めて聞く言語で戸 惑いましたが、やっていくうちに興味が出てきました。しか し、16の母音のある発音は、日本人には困難なものもあ り、途中からついていけなくなってしまいました。スポーツ の授業では、私はパルクールを専攻しました。前述したよ うに、もともとパルクールというスポーツにも興味があっ たからです。この授業では毎日の練習で精神的にも身体 的にも成長していると実感出来ました。



▲パルクールの練習風景

金曜日の夜はオフになり、仲間と外のパブに飲みに行きました。初めて日本以外のビールを飲んだ時は、何か不思議な感じになりました。カタコトの英語でしか話せませんでしたが、ビール片手に喋って、飲んで、ゲームをしてとても盛り上がりました。千鳥足になり学校に帰り寝る、そんなことも楽しい思い出です。

(2)行事

オレロップでは、授業以外にも行事があります。一か月 が経ち、学校に慣れたころ色々な行事が始まりました。

初めての行事はコペンハーゲンに1週間宿泊し地域を 盛り上げるボランティアの行事でフラッシュモブをしまし た。フラッシュモブとは不特定多数の人々が申し合わせ、 歩行者を装って通りすがり、公共の場に集まり前触れも なく突如としてダンスや演奏を行って、周囲の関心を引い たのち解散する行為です。空き時間には観光も出来まし た。フラッシュモブはうまくいき地元の人達はとても喜ん でくれました。私自身も滅多に出来ない経験で、とても楽 しく出来ました。コペンハーゲンでの最後の夜はチボリ遊 園地で遊びとても楽しかった1週間でした。

コペンハーゲンの行事から数日経ち、留学生同士の仲 が深まった時期にインターナショナルデイが始まりまし た。インターナショナルデイは自分の国の特徴や伝統など をデンマーク人の生徒達に伝えたり体験してもらったりす る催しで、私たちは浴衣や甚平を着て折り紙と書道に取 り組みました。デンマーク人の生徒達は興味を示して、私 も慣れない英語で、折り紙の折り方を教えました。そして、 午後には夕食を作りました。この夕食は、留学生がそれぞ れの国の料理をデンマーク人の生徒達に提供するもの で、私たちは寿司を作りました。みんな各国の料理を興味 津々に食べて周っていました。





▲ガラパーティーの一コマ

前期の授業がすべて終わり、前期最後の行事はガラ パーティーでした。これはダンスパーティーで、1週間かけ

て準備を進めていきました。そんなある日、男子学生全員 が招集され、何かと思い行ってみるとパーティーで一緒に 踊る相手の抽選会でした。相手はクジ引きで決まります。 引いたクジに名前が書いてありその人が相手になると言 う説明でした。そのあと1週間以内に自分の相手をパー ティーに誘わなくてはいけないのですが、日本人にはその ような経験がなかったので、日本人男子が協力し合って 何とか誘うことが出来ました。パートナーが決まり一安心 しましたが、まだダンスの練習があり、相手をリードしなけ ればならないのですが、経験のなさで相手女性にリードさ れっぱなしでした。ドタバタしながらも何とか本番に間に 合い、無事に成功で終えました。これが前期の最後のパー ティーだと思うと、とても寂しさを感じました。というのは、 前期で留学を終え帰国する友達がいたからです。後日お 別れの会があり、皆と握手をかわし、ハグをして別れを告 げました。

私は後期に向けて準備を始めました。後期まで2週間 あったので1週間は日本に一時帰国し、大学の先生達に 挨拶回りをし、大学の休学手続きの確認など、時差ボケと 闘いながらやっていました。帰国してからは日本食がとて もおいしく感じました。

残りの1週間はチェコの友達が家に誘ってくれていたの で、オーストラリア人の子とチェコに遊びに行きました。友 達はとても気を使ってくれて色々な所に連れて行ってくれ ました。最初はセグウェイでチェコの町を観光しました。 初めてのセグウェイなので少し緊張しましたが案外簡単 に乗りこなすことが出来ました。さらに、彼の家でお姉さん と話をしているうちに、私の姉とオレロップでの同期生で



▲チェコの友人たちと

友達だということがわかりました。彼のお姉さんとも仲良くなり、4人と彼の甥とでスケートをしに行きました。最後の夜はスキーに連れて行ってくれました。とはいっても、スキーではなく子ども用のソリ遊びでした。新年を迎えるため彼の親戚が集まりお酒を飲んだり、ゲームなどをして遊びながら新年を迎えました。こうした経験も、日本では味わえなかったものでした。

デンマークに帰る時にまた、事件が発生しました。空港に向かう途中に乗るはずだったバスに乗り遅れ、バス停で迷子になってしまいました。そこで、電車で空港近くまで行き、空港行きのバスに乗ろうとしましたが、お金が足りなかったので乗るのを諦めかけました。しかし、飛行機までの時間がなく、現金もなかったので、カードが使えるタクシーを拾おうとした時、バスから女性が話しかけてきてお金を恵んでくれました。私はその瞬間、感謝で泣きそうになり、ありがとうと連発しました。この見ず知らずの方の親切は、チェコでは楽しかったことよりも印象深く残りました。

この旅行では、デンマークに戻るのは戸惑うこともな く難なく学校に到着することが出来少し自信がつきまし た。2週間ぶりに皆に会えましたが、何人かは自分の国や 家に帰ったため知っている人は減っていましたが、新しい 人たちがたくさんやって来ました。前期の反省を生かし、 できるだけ自分から積極的に話し友達を作っていこうと 心に決めて後期に臨みました。でも、ほとんどがデンマー ク語で喋っているので喋りかけることが難しかったのです が、次第と話せるようになり、友達は次第に増えていきま した。新しいルームメイトもやってきて、前のルームメイト には英語が話せなかったという反省から、次は頑張ろう と思いました。そうした気持ちが伝わったのか新しいルー ムメイトは気を使ってくれて毎日話しかけてくれました。日 本人が学校に全員戻ってきたので日本人会を開き、これ からのことを話し合いました。授業は前期より内容が濃く なって、選択授業などが増えるとともにインターナショナ ルの授業も話し合いだけでなく、パワーポイントなどを使 い自分の課題や先生が出した課題について見解や意見な どを発表し、それに対する一人ひとりの意見についててい ねいに話し合いまとめるということを主にやっていました。 発表は英語なので練習したり読む文章に振り仮名をつけ たりして、努力しました。

二か月が経ち後期も落ち着き、最初の行事である2回目のインターナショナルデイが始まりました。この催しでは、鳥居を作ることになりました。デンマーク人が増えたので巻き寿司作りの体験も企画しました。デンマーク人達は初め見る鳥居と初めて作る寿司に興奮し、予定より多く作ることになりました。夕食は前回同様留学生の生徒達の料理で終わりました。インターナショナルデイはうまくいき、デンマーク人達も今度日本へ行きたいなどと言ってくれました。



▲2回目のインターナショナルデイで日本チームのメンバー

最初デンマークに来た時は不安や心配がありましたが、半年過ぎると日本に帰りたくない感情も出てきて、時間が経つのも早く感じました。そんなことを思いながら授業を淡々とこなしていき、次の行事準備が始まりました。

修学旅行もありました。ノルウェーに1週間、スキーとスノーボードをしに行きました。ノルウェーには学校からバスと船を利用しました。ノルウェーに着いて班ごとに分かれ自分たちのペンションに行きました。私はスキーをしたことがあったのでスノボーに挑戦しようと思いましたが、初めてだったのでスキー用とスノボー用の靴があることを知らず、間違えてスキー用の靴をレンタルしてしまいスタッフの人に笑われてしまいました。無事にレンタルが終わり、滑り方を教えてくれる先生の場所に行くと、先生が

パルクールの先生だったので気持ちが軽くなりました。 午前に基礎的なことを練習し、午後はいきなり普通コー スを滑ることになりしました。滑り始めてからまだ数時間 だったので何回も尻もちをし、ヘッドスライディングもし ました。初日は慣れないこともありとても疲れましたが、日 が経つにつれ上達していき、楽しむことが出来ました。慣 れてくると難しいコースに行き、難しいことに挑戦したくな るものですが、油断大敵とはまさにこのことだという経験 をしてしまいました。間違えて重心を前の方に倒してしま い、スピードも出ていたのでものすごい勢いで前に飛んで しまい、胸と顔を強打してしまいました。一瞬意識が飛び、 目の前が歪み、しばらく動けなくなり、立ち上がっても目眩 とふらつきでうまく歩けていなかったと思います。しかし、 ちょっと休みをとればすぐに元通りになったので、スノー ボードを再開しました。最後の夜はみんな近くのクラブに 行き、お酒を飲んで踊って喋って、1週間のノルウェーの 修学旅行が終わりました。



▲ノルウェーの修学旅行

後期の授業も終盤に差し掛かり、最後の授業では将来 自分がやりたいことをどうしていくかの計画発表がありま した。私はまだ何をしたいかわからなかったので、海外に 関する仕事がしたいと話しました。明確な目標ではなかっ たので発表は全然ダメでした。後から先生にも「何が言い たかったのかわからなかった」と評価されました。最後の 授業なのにきちんと出来なかったことが今でも心残りで す。

パルクールの最後の授業は、学校の人や地域の人達に

パルクールの説明をしながらお手本を見せるというもの でした。私は自分が出来る高難度な技を披露しましたが、 補助付きだったのがやや悔しい気持ちでした。

そのあと参加者にパルクール体験を試してもらいまし た。我々生徒はケガをしないように補助にまわり、無事に 終わることが出来ました。

授業のカリキュラムがほとんど終わると、次の準備 が始まりました。今回4年に1度の「Internationals Deutsches turnfest」がドイツであり、1週間ドイツに滞 在しそこで体操の発表をすることになりました。ドイツで は、色々な地域で体操の発表をするとともに、発表のため の別バージョンの体操の練習も行いました。発表はドイツ のオリンピックスタジオで行われるため、前日練習をした 時には今まで感じたことのない迫力を感じました。本番当 日は悪天候でしたが、緊張と興奮の中何とか本番を無事 に終えることが出来ました。終ったあとの控室では、みん なで輪になりお互いの体を抱き合い大声で歌いました。 これも、忘れられない思い出となりました。



▲ドイツのオリンピックスタジアム



▲2回目のガラパーティー

学校に戻って数日後に2回目のガラパーティーの準備 が始まりました。

2回目のガラパーティーは女性の方が多いので、前期とは逆で女性が男性を誘い、女性2人に男性1人という組み合わせになりました。女性からパーティーに誘ってもらい嬉しかったことがとても印象に残っています。パートナーが決まりダンスの練習が始まり、前回のように女性にリードされるのではなく、リードすることに一生懸命でした。パーティーでは2人分踊ったので倍近く疲れましたが、何とかリード出来たと思うので良かったです。

すべての授業が終わり先生から挨拶と生徒からお別れ の言葉などがありインターナショナルの生徒達で集まり 先生から感謝の言葉を貰いました。

Ollerup最後の行事は、デンマークの違う地域に行き、 色々なホイスコーレの人達との交流でした。他のホイス コーレのダンスを見学し、我々がドイツで発表した体操を 披露しました。次の日の朝にはほとんどの人が学校に戻ら ずにそのまま家に帰ります。朝を迎えて荷物をまとめ外で 円になりみんなに握手とハグを一人ひとり周っていきました。私は周っているうちに今までのことが頭に浮かび友達 と別れる寂しさや悲しさがこみ上げてきて泣いてしまいま した。全員との握手とハグが終わり、そのまま帰宅する人 達との別れを告げ学校に戻りました。

こうして、1年間の留学が終わったのですが、この期間の体験で私は日本じゃ経験出来ないことや素晴らしい体験をすることが出来ました。初日のデンマークでの迷子、チェコでのバス代を恵んでくれた女性、学校での私生活や授業、行事で多くの人から助けてもらいました。この手助けがなかったら私はどうなっていたかわかりませんでした。人の親切さは、洋の東西を問わず同じだということを痛感しました。この素晴らしい体験を忘れず、日本での生活に臨みたいと思いました。デンマークで知り合った多くのデンマーク人、インターナショナル、日本人の人達との繋がりを大切にしていきこのデンマークで過ごした1年という時間を生かし将来に役立てたいです。



▲平成29年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)銅賞受賞作品 『将来』 丸野 大樹(工学部 交通機械工学科)



世界一受けたい日本語の授業

企画委員長 青山 一樹

2017年11月20日、日本を代表する国語学者である金 田一秀穂氏(杏林大学外国語学部教授)による講演会が 多目的ホールで行われた。

各メディアに多数 出演されており、朗ら かで親しみやすい印 象を受ける人が多い と思われる。

講演が始まり、簡単 な自己紹介をされる とすぐにステージから 降り、学生達に幾つか の質問を投げかけた。



始めに、「経済学部の人」、「経営学部の人」、「工学部の 人」という具合に、学生達との距離を縮めて話しやすい場 を作られていた。

そして、「勉強」についてという内容では、覚えることが 勉強だと勘違いしがちであるが、人が覚えられる記憶量 はコンピュータにかなわない。また、「考えること」が人とコ ンピュータとの違いであると思われてきたが、近年ではAI も発達しており、違いが少なくなりつつあるということが 話された。



これから、どのようなことが必要になるか、「前」という言 葉を挙げて学生達に問いかけた。

金田一氏がステージ上で「金田一は机の前に立ってい る。」と言い、客席から見てステージの机(演台)の前に金 田一氏が立った。机、金田一氏、客席の位置関係になる。

続いて、机(演台)の正面に金田一氏が立ち、「金田一は 机の前に立っている。」と言った。金田一氏、机、客席の位 置関係になる。

どちらも「前」であり、どちらも正解である。

矛盾しているのではと感じた学生がいたかもしれない が、位置関係を表す場合は前者の表現、方向性のあるも のを基準にする場合は後者の表現になることが説明さ れ、全員納得出来たようである。

同様に、前という言葉は過去と未来を表す場合があり、 「前の日」のように用いる場合は過去、「期限が前に迫っ てくる」のように用いると未来を表すことになる。

話題が変わり、「○○おき」という言葉についての問い かけとなった。

「1日おきにアルバイトをする」このような使い方をする 場合、例えば月、水、金にアルバイトをすることが分かる。 しかし、オリンピック開催年の場合は「4年おき」になるのか 「3年おき」になるのか。

これについて学生から活発な発言があり、非常に盛り 上がる内容となった。



尊敬語や丁寧語を使うことが正しい日本語だと思われ がちであるが、相手を納得させられるように言葉を考える ことが大切であると提言され、講演会は幕を閉じた。

今回の講演に参加した学生達は、普段使う言葉につい て、一考する機会になったのではないでしょうか。

(全学教育機構 テクニカルセンター 講師)

留学記

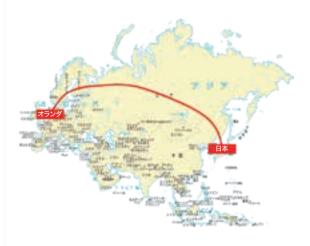


海外留学記

藤井 陽一朗

1. オランダについて

私は、平成28年4月から9月までの6カ月間にわたって オランダにあるエラスムス大学に留学していました。私 の留学したエラスムス大学は、オランダ第2の都市ロッテ ルダムにあります。オランダは、日本から飛行機でおよそ 12時間の距離にあります。オランダという国名の語源が、 「低地の国」である通り、機上からみると水路と緑に囲ま れた国です。オランダは、九州ほどの広さの国土に東京都 と同じほどの人々が暮らしています。



経済では、チューリップやチーズといった農業・畜産業 のみならず、石油メジャーのロイヤル・ダッチ・シェルや 家庭用品のユニリーバ、家電のフィリップスなど世界企業 が数多く存在する経済大国です。また、オランダと聞くと 風車やチューリップを連想する人も多いと思いますが、風 車の多くが水をくみ上げるために今でも現役で活躍して います。スポーツではサッカー、水泳、自転車、スケートな どがさかんです。さらに、野球も競技人口が多いので日本 人とも共通する話題がたくさんあります。

歴史的にみると、オランダと日本とのかかわりは古く、 江戸時代の鎖国時にも日本はオランダとの交流を続けて いました。オランダからもたらされるさまざまな知識は「蘭 学」とよばれ、明治維新の下地を形成することになりまし た。日本の交易窓口は長崎の出島でした。医師シーボルト はオランダにあるライデン大学の教授をつとめていまし た。オランダでは地名や店名に「Deshima」、「Dejima」と いうところが数多く残っていることからも交流の深さを思 い浮かべることができます。

2. ロッテルダム市について

私が留学していたロッテルダム市はオランダの南部に 位置しています。ロッテルダム市には63万人あまりの人々 が暮らしています。

この街には、ロッテルダム港というヨーロッパ最大で世 界でも屈指の貿易港があり、数多くの船が行きかっていま す。オランダ最大のアムステルダム市をライバル視してい るので、ロッテルダム市はちょうど大阪と同じような地位 にあると言えます。ロッテルダム市は第二次世界大戦時に 市街地が破壊されたことから、ダッチ・デザインと言われ る斬新なデザインの建物が数多く見られます。特に、ファ ン・ネレ工場は世界遺産にも登録されています。

3. エラスムス大学での研究について

日本には800校近くの4年制大学が存在していますが、 オランダで「大学」とよばれるものは、わずか十数校しかあ りません。オランダの高校生のうち、大学に進学できるの はわずか10パーセントあまりで、非常に高い意識を持ち ながら勉学に励んでいます。

エラスムス大学は経済学の中でも特に医療経済学や 健康経済学とよばれる分野で世界のトップを走っていま す。これらの分野は、病気にかかった時の治療方針の決定 や予防行動の効果の測定、健康に生活することが社会に とってどのくらいプラスの効果があるかを経済学の視点か ら分析しています。一見すると経済学とは関連がなさそう に見えますが、医学の中に経済学の効率性を重視する考 え方を取り入れることで、多くの国々で幅広く研究されて いる分野です。残念ながら、日本では発展途上である分野 であることから、世界でもトップの地位にあるエラスムス 大学で研究に取り組めたことは、大きな財産になっていま す。

私をエラスムス大学に招聘してくれたピーター=ワッ カー (Peter Wakker)教授は、健康経済学分野だけで なく、分析の基礎となる意思決定理論分野においても数 多くの業績を出している世界屈指の研究者です。

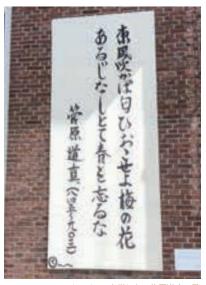
多くの研究業績を出し続けるために、ワッカー先生は チームで研究に当たっています。定期的にミーティング を繰り返しながら、新しい研究テーマを探し続ける姿勢 に圧倒されました。また、「分かるまで何度もトライしてみ る」、「新しい知識を得るために労力を惜しまない」という 学生にも通じる学ぶ姿勢を徹底的かつ真摯に続けている ワッカー先生の姿勢に大きな衝撃を受けました。

4. 留学の良さについて

新入生のみなさんには、これから4年間という時間が与 えられています。私はこの時間を使ってみなさんが将来に どうやって生きていくのかを悩む時間にするべきだと考え ています。留学は、費用もさることながら、異なる言語・文 化に飛び込むという非常にハードルが高いイベントの1つ です。しかも、自分から積極的に動かないと実現しないと いう点でも、日本の大学生にとっては実現させることが難 しいものになっています。しかし、留学によって自分の視野 を広げておくことは、将来必ずやってくる卒業後の進路選 択において大きな役割を果たしてくれます。

本学にはさまざまな留学制度がもうけられていること から、他大学の学生に比べてかなりハードルが下げられて いると思います。これらの制度を活用しながら自分の可能 性を大きくしていけるように時間を使っていってもらえれ ば、進学して良かったと心の底から感じることができると 思います。充実した学生生活が過ごせることを心から祈っ ています。

(経済学部 経済学科 准教授)



▲ライデン大学にある菅原道真の歌



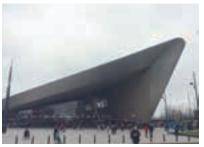
▲キューケンホフ公園のチュー



▲世界遺産キンデルダイクの風車



▲エラスムス大学の外観



▲ロッテルダム中央駅

アメリカ留学記-東西海岸でのフィールドスタディより

新矢 麻紀子

アメリカ留学

学生時代から「いつかそのうち」と思いながら実現でき ていなかった念願の海外留学がようやく叶えられた。本 学から留学の機会をいただき、2016年4月から1年間、 アメリカに滞在した。私は日本における移民(日本では移 民という表現は正式には用いられていないが)への第二 言語としての日本語教育のあり方について研究しており、 アメリカでは、移民への第二言語としての英語教育の政 策、教育内容と方法、教員養成について研究した。

留学先の選択は、留学の成否を決めるとても重要な 要因である。イギリス、フランス、オーストラリア、韓国で は移民に関する調査を実施していたが、当初アメリカに はあまり関心が向いていなかった。しかし、昔からの研 究仲間であり、成人基礎教育や識字教育を専門とし、日 本の識字教育や夜間中学にも詳しいモントクレア州立 大学(Montclair State University)の准教授、Erik Jacobsonさんが2014年に来阪し、ニュージャージー 州(NJ: New Jersey)における成人教育や移民への第 二言語としての英語教育(ESL: English as a Second Language) に関する調査報告をしてくださったのが非 常におもしろく、ぜひ現場を見てみたいと思った。そして 2015年3月にNJとその対岸のニューヨーク市(NYC: New York City)にある、個性豊かな移民支援機関を数 多く案内していただいた。1週間の滞在では十分な情報 収集ができず、もっと知りたい、という思いが強く残った。

この調査訪問が決め手となってモントクレア州立大学 に客員研究員として受け入れていただくことが決まった。 さらにErikさんの「アメリカは地域によって政策も教育も ぜんぜん違うから、西海岸も見てみたら?」という一言か ら、Erikさんのハーバード大学大学院時代の友人であ り、第二言語習得と教員養成を専門とするMaricel G. Santosさんが准教授を務めるサンフランシスコ州立大学 (SFSU: San Francisco State University) にも留学 の後半にあたる秋学期に受け入れていただくことになっ た。

東海岸:ニュージャージー州、ニューヨーク市でのフィールドワーク

モントクレア州立大学は、ニューヨーク市マンハッタ ンの西を流れるハドソン川の西側に広がるニュージャー ジー州モントクレア市に位置する州立大学である。モント

クレア市は閑静な高級住宅 地で、マンハッタンから電車 かバスで40分程度と便利な ため、ニューヨークのベッド タウンとなっており銀行家や 有名タレントの豪邸もあり、 町全体が洗練された雰囲気 を見せる。大学は学生数約 2万人の中規模校で、Arts. Music, Mediaなどの学部が 有名である(写真1)。



私の研究は、移民支援の団体や移民が学習する教育 機関に出向いて調査を行うoff campus research(学 外での研究)主体なので、Erikさんに研究の相談をする か、図書館に行くか以外はNJとNYCにある移民支援機 関でフィールドワークを行ったり、研究会に参加したり、 移民支援機関連合の委員会に出席させていただいたりし ていた。アメリカでは車を持たず、電車や地下鉄、バスであ ちこち駆け巡ったおかげで、NJの一部とNYCについては 一人で迷わず歩けるくらいの土地勘ができた。

NJ/NYCには数多くの優れた移民支援団体がある が、なかでも、私が強く興味をそそられ頻繁に通った機 関がいくつかある。1つは、NYCマンハッタンの南東 部にある1886年創立の歴史あるNPO、University Settlement。成人向け英語教育をはじめ、子ども向け、 高齢者向けプログラムや、絵画やダンスなど多様なプログ ラムを開催している。Adult Literacy(成人対象リテラ シー教育。英語教育はここに含まれる)だけでも、2018 年度予算が\$932.000(国+州)+\$100.000(市)、学習 者数が年間のべ700人いる。非正規移民でも無料か教 材費だけで様々なクラスを受講できる。Adult Literacy のディレクター、Michael Hunterさんによれば、ここの一番の特徴は、1年間という長期の英語教育プログラムを提供している点で、他の機関にはないと誇らしげに語ってくれた。英語ゼロの学習者も卒業時には就職できるレベルに達するというのは、まさしく「言語保障」だと言えよう(写真2)。



▲写真2 University Settlementの移民対象英語クラス

もう1つは、Make the Roadである。こちらも大きい NPOで、NYCのブルックリンやクイーンズに4ブランチあり、NJにも新たに設立されている。ラティーノ(Latino)と呼ばれる中南米出身移民を中心に支援している。ラディカルで闘争的で、政府や自治体、権力に挑むNPOである。NJ事務所の責任者であるSara Cullinaneさんは、「ワシントンD.C.の抗議集会では、わたし、逮捕されたの!」と首をすくめながら、手錠をかけられて連行されていく写真を見せてくれた。権力には激しく立ち向かうけれども、移民には優しく寄り添い、みんなが安心できる場をつくりだしている(写真3)。



▲写真3 Make the Road NJの抗議集会 右がSaraさん

西海岸:サンフランシスコ州立大学大学院での英語教員養成研究

2016年8月にカリフォルニア州サンフランシスコ市に移った。NJもNYCも高緯度からは想像できない蒸し暑さだったのに、サンフランシスコ初日は、ジャケットを着ても震えるほどの寒さだった。カリフォルニア=太陽が降り注ぐイメージだが、マーク・トウェインが「人生で最も寒い冬はサンフランシスコの夏だった」と言ったほど夏は冷え込む。そのかわり、9-10月には日本の小春日和とも言えるIndian Summerとなり、爽やかな夏が来る。その後、冬は来るがさほど寒くはならず、一年を通してほとんど変わらない過ごしやすい気候なのだと感じた(写真4)。



▲写真4 11月のファーマーズマーケット。まだIndian Summer

秋学期からサンフランシスコ州立大学(SFSU)の TESOL(Teaching English to Speakers of Other Languages: 第二言語としての英語教育法の研究)の大 学院に客員研究員として在籍した。SFSUは約3万人の 学生を擁する大学で、MBAとTESOLが優れた評価を得 ている。特にTESOLは英語教員養成では全米1、2とも 言われるほどで、数多くの有能な英語教員を輩出している (写真5)。



▲写真5 San Francisco State University

東海岸の時とは一転して、SFSUでは大学院の授業 に参加し、教員や院生とのディスカッションに参加し(英 語に苦しみながら!)、院生と共にプロジェクトに汗を流し た。また市民性教育の一環として、毎週、サンフランシスコ 市立大学(City College of San Francisco)のチャイ ナタウン・キャンパスの移民対象英語教室にアシスタン トとして参加し移民への英語学習支援をするという貴重 な経験をした。さらに、受け入れ教官であるDr. Santos がラティーノ支援NPOと協働で実施する教育実践プロ ジェクトに参加した。アメリカは移民大国であるが、意外 にも移民への英語教育に配慮した教員養成を行ってい る大学は多くない。SFSUのTESOLカリキュラムの最大 の特徴は、留学生への英語教育のみならず、移民への英 語教育を重視したプログラムとなっている点である。Dr. Santosがその中心となって教育を展開しており、例えば、 私も参加したTeaching English in the Communityと いう科目では、大学院生たちは、移民の状況、移民にとっ ての言語習得の課題について学習する。そして実際に自 分たちで教材の作成を行ったり、移民の種別ごとにその 特徴や課題を明らかにするグループプロジェクトワークな どを行ったりしていた(写真6)。また、Curriculum and Assessmentという科目でも、大学院生がオークランド (Oakland) にある難民支援センターにフィールド調査 に赴き、難民向けの英語カリキュラムの開発を行ってい た。



▲写真6 院生が移民用英語教材を作成して発表。奥の右端がDr. Santos

SFSUでの研究期間の締めくくりとして、TESOL Talkという研究会での講演依頼があり、"Japanese Literacy Education for Immigrants and Minorities in Japan: From the Viewpoint of Social Justice and Equity (日本における移民やマイノリ ティへの日本語リテラシー教 育:社会正義と公正の視点か ら)"という題で講義を行う機会 をいただいた(写真7)。



▲写真7 TESOL Talk

トランプ大統領誕生とその影響

アメリカ滞在中に衝撃的な出来事が起こった。トラン プ大統領の誕生である。家に帰ってラジオをつけて、耳を 疑った。「トランプ当確?!」聞き間違っているかと思い、ネッ トでも確認したが事実だった。私が暮らした東西海岸で は、サンフランシスコの家主さんである中国系アメリカ人 女性以外には、トランプ派だという人に出会ったことがな い(公にしにくいかもしれないが)。だれもの「まさか」が現 実になった。翌日、大学に行くと、授業の半数以上が休講 になっていた。教員たちもショックで授業どころではない とか、抗議集会に出かけているとか、という噂だった。私 が参加していたクラスは開催されたが、通常の授業では なく、大統領選をテーマとしたディスカッション。学生たち が今の気持ちを語り、今後の行動について考えた。泣いて いる学生も何人かいた。私が仲がいいべラは、朝から抗

議デモに行ってきた、と言っ ていた。ベラはその後、ワシン トンD.C.に行ってWomen's Marchにも参加した。サンフ ランシスコでは、大学生だけ でなく中学生や高校生も学 校の先生と一緒にデモ行進 を行っていた。若い人が政治 に関心を持ち、自分たち自身 で行動を起こし、社会を変え ようとする。そのあたりが日 本との大きな違いだと感じた (写真8)。



▲写真8 トランプ大統領当選翌日 の抗議デモに参加してき

学生だけでなく、移民支援NPOの職員や英語教員も

同様に、移民排除を謳うトランプ大統領や、予算削減を強行しようとする行政への対抗行動を行っている。例えば、私が最後に東海岸に戻った2016年3月、Make the Road NJでは、突然、強制連行された移民を取り返す抗議集会と記者会見が行われ、NYCでは、ニューヨーク市成人識字教育機関連合(NYCCAL: New York City Coalition of Adult Literacy)が学習者とともにESL予算獲得のための記者会見を行った(写真9)。また既存の団体だけでなく、Adult Literacy Center代表のIra Yankwittさんが中心となってMobilizing Literacyという新たなグループを立ち上げ、勉強会や抗議デモを行うなど、皆が行動を起こしている。



▲写真9 NY市への予算要求記者会見で抗議文を読む学習者とNPOディレクターのJulieさん

トランプ大統領は、「強いアメリカを再び!」と言っているが、彼の言動は反対の立場にいる人たち、排除しようとしている人たちをより強くしているのかもしれない。

"Stand Up! Fight Back!"(立ち上がれ!やり返せ!)

今後の研究活動・教育実践に向けて

日本では、移民受け入れの歴史も浅いため、移民向けの日本語教育カリキュラムや日本語教材の開発も端緒に着いたばかりで、教員養成のあり方の検討も課題である。学生等の若い世代や移民当事者も含めた市民へのアドボカシー活動や市民性教育を広め深めることも重要である。アメリカで得た情報と知見を、移民への教育支援に活かすこと、そして、本学に開設された国際学部での教育に反映していくことを目指したい。

最後になりましたが、1年間の在外研究という貴重な 機会をいただきましたことに心より感謝申し上げます。ま た、ご協力、ご支援くださいました旧教養部、国際学部の 先生方、お世話くださった職員の皆さまに厚くお礼を申し 上げます。

(国際学部 国際学科 教授)

ドイツUDE留学記:フィールドワーカーとして、新たに目指すべきもの

李 澤建

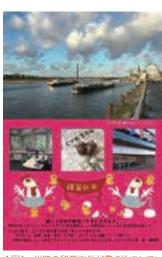
留学決意に至る経緯

"Dies Marchen Wird Wohl Niemals Wahr. Das Leben Lehrt Sei Klug Und Spar (The fairytale will probably never come true. Life teaches you to be smart and save)"。元々デュッセルドルフの旧市街 の街角にある銀行の外壁に掘り込まれたものですが、帰 阪後ドイツでの体験が聞かれるたびに、このドイツの古き 格言が頭に思い浮かびます。最初に「Be smart and save (賢くあれ、そして蓄えを!)」という文が目に入った瞬間、 この数年抱え続いたある悩みが一気に摘み取られたよう な開放感がこみ上げました。

「30代までには就職のために、ひとつのテーマをひたす らに掘り下げるのはいいのだが、安定後40代に入れるま でにはあえて一度『よそ見』するきっかけを作ってほしい」 と大学院生の時代、指導教官から言われた一言です。そ して、2012年に産大へ赴任してから、次第に「よそ見」の こと、つまり「40代になってから10年スパンで考えられう る研究テーマ」を思うようになりました。研究領域では、中 国民族系自動車メーカーの成長戦略に関する研究で学 位を取得してから、東大時代に研究領域を新興国まで広 げたものの、依然アジア中心でした。研究方法はフィール ドワーク中心の実証研究で、過去10年間で600超の企 業調査も行いましたが、「このまま数だけを増やしていい のか」というもやもや感がずっと残っています。

これまで、新興国民族系自動車メーカーの成長戦略を 研究している時、「本国にすでに存在している外部資源を いかに会社の内部へ取り入れ、能力へ転化していったか」 という能力構築のメカニズム解明に力をいれてきました。 2010年以降、新興国の市場拡大と競争激化の結果、各 新興国民族系メーカーが競い合って海外研究拠点を設 置しはじめ、よりいっそう広範囲な資源獲得と高度な能 力構築の競争が繰り広がるようになりました。当初、日本 と欧州が主たる設置先でしたが、近年になり、欧州拠点で の能力増強と対照に、日本拠点の縮小閉鎖が相次ぎ起こ りました。そこで、「なぜ新興国自動車メーカーが近隣の

日本ではなく、遠い存 在の欧州との共進化を 選ぶようになったのか」 と思い、数年前から欧 州を調査しようと考え 始めました。「そうだ、そ れを『よそ見』の第一歩 にすれば」と遂に留学 の決意を固めました。そ して、「Be smart=新 発想」と「Save=新た な調査データの蓄え」



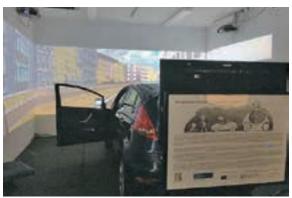
を胸に、2016年10月1日に渡独し、デュースブルク・エッ セン大学(Universität Duisburg-Essen: UDE)で一年 間研究滞在することになりました。その時、自分が決めた 留学方針は「執筆・読書・調査」でした(図1)。新天地に て、調査を継続しながら、新たな進行方向の兆しを感じ取 る意味合いです。

ドイツ流経営学との出会い

UDEは下ライン地方のノルトライン=ヴェストファー レン州にあり、2003年にデュースブルク大学とエッセ ン大学の合併によって新たに生まれ変わった新しい国 立総合大学です。学生総数が4万人以上を数えます。文 理11の学部が、デュースブルクとエッセンの両キャンパ スに立地し、その間、路線バスが通っています。私が通う デュースブルクキャンパスの前身が旧デュースブルク大 学で、その歴史が長く、17世紀中葉に設立されて以来、 ルール地方の玄関先として、地域内の産業発展を見守っ ている存在となっています。そして、ルール地方の重工 業の衰退に伴い、UDEも地域の脱成熟化のけん引役と して、新たな価値創造を目指しています。これは、私が所 属 し たChair of General Business Administration and International Automotive Management(以 下:GBAIAM講座)のビジョン設定からも垣間見るこ

とができます。俗にいう「ドイツ流経営学」の経営経済学 (General Business Administration) に立脚しなが ら、自動車産業の国際経営(International Automotive Management) を志向するために、自動車メーカーへ就 職するエリート管理職人材の育成にとどまらず、自動車の 将来を左右できる「モビリティ」競争に対して、技術駆動 型のイノベーションを担うオープン・マインド人材の育成 を目指すのです。その実現に、「自動車産業論」、「自動車 産業経営史」、「国際経営」、そして「戦略論」などの日本で ばらばらに存在する個別な研究フレームワークを学際的 に融合させるだけではなく、文系でありながら、講座実体 が工学部に配属され、電子、IT、機械科などの関連分野 との一体型の連携が要求されています。こうしたことで、 ケーススタディによる個別フレームワークに基づく帰納= 演繹というアメリカ流れに比べ、いっそう大局観の持つ時 代の流れを切り開くような「そもそも論」の性格が際たつ。 方法論に悩まされているフィールドワーカーの私にとって 最も補完性を有する場所です。

一例を挙げると、私の留学時、二期目に入ったEU規模の研究プロジェクトでは、GBAIAM講座の皆が同学部内のIT、電子、機械科が製作したHardware In the Loop Simulatorを利用して、電気自動車を運転する際、シニアドライバーたちの特有な動きの抽出を行っているのです(図2)。関連データは、企業パートナーが多数参画しているコンソーシアムにて、デザイン会社と共有したり、自動車会社と共同分析したりして、E-Mobility社会到来後の自動車流通の変容が消費者の行動様式をいかに



▲図2 現に実施中の「E-Mobility普及とシニアドライバーの運転行為解析」というユーザーサーペイ

変貌させうるかという問いに関する検討材料に用いられているようです。それに基づき、来たるエレクトロ・モビリティー社会で相応しいビジネス・コンセプト・イノベーションの在りようについて、実用性を有する提案に知恵を搾り出します。

当初、滞在の受け入れ条件として、執筆活動のほかに、①講座責任者のProff教授との共同研究・執筆;②若手との共同研究及び調査補助;③「International Automotive Management」への出講が言及されました。①と②は主にこうした研究プロジェクトに沿って、私が蓄積している現場調査による実証経験が活かされるように、「Dynamic Capability」や「拠点間のコンフリクトと協業」などの切り口で共同研究を進めていくようになっています。

到着直後、講座の皆さんが私を温かく受け入れてくれました(図3)。日々の議論を重ねていく内、方法論的志向型の色が強い講座の研究体制に対する理解も次第に深まり、大手自動車メーカーの中央研究所でしか体験できない先行研究チームに入ったような錯覚が度々起こります。これは「そもそも論」の重要性を再認識させられた貴重な体験でした。



▲図3 私の顔写真が入ったGBAIAM講座紹介のスライド

目指すべきものへの道のり

紙幅のため全部書ききれませんが、貴重な体験はもうひとつあります。ドイツでは学部卒業には240単位が必要です。そのため、大学では開講時間も日本より早く朝8

時からスタートするように なっています。偶々恵まれ たかもしれませんが、私の 出講した講義では、遅刻 した途中入室者がなけれ ば、居眠りする人もいませ んでした。真剣なまなざし に励まされ、力が入ります。 そして、毎回終了後学生た ちが、拍手ではなく、指の



▲図4 出講終了直後の教室風景

関節で机をたたき、感謝の意を送ってくれます。意気投合 の一体感が漂う講義にやりがいを感じ取りました。

時には、元気な学生に囲まれ、質問されることもあれ ば、一時間半にも及ぶ激論のケースもありました。その 中、一番深く印象に残ったのは、下記の問答でした。

Q:「日本のものづくり企業はこれまで設計情報を顧 客までの価値創造連鎖の各セッションにおいて、でき るだけ正確かつ効率よく異なる媒体に転写していく 過程に競争優位を見出している。そしてそのやり方は 今の内に韓国、近い内に中国の企業にも浸透してい くだろう。こうした長い残業時間をしのぶまでも必死 に働くアジア企業から来たる挑戦について、君たちは どう考えているのか?」

A:「われわれはいつも家族のことを大事にしたいし、 現在の週40時間、もしくは36時間は長い闘争の結 果である。挑戦が来るからといって、労働時間を増や すつもりは一切ない」

Q:「そうなると君たちの企業の競争優位をどう維持 できるか?」

A: 「もちろん、ドイツでもよく働く人はいるが、われ われはおそらくより賢い働き方が必要だろう、よりよ いアイディアなど。。。。」

アジアの企業はイノベーションできないのかと、追い 討ちをしたかったのですが、所詮、学部生なでの、ここまで 「イノベーション」の重要性を言及できたのも上出来で、 議論をここで打ち切りました。実はその後、同様な質問を 北欧調査の際に繰り返したら、スウェーデン人経営者か ら意味深い回答を得ました。

「眼下欧州の40時間労働の現状はある意味では発 達するアウトソーシングサービスのおかげである。ア ジアの企業が進化し、もちろん挑戦が増えるが、分業 がよりいっそう進む可能性もあるに違いない。より賢 い働き方とは、誰に何を任せるのを知ることであろう。 時には流れを新たに作ることも大事だ」

「ウサギとカメ」の物語では、俊足で自分を追い越したウ サギの背中に対して、カメは進路を変え、「お~い、正しい 方向はこっちだよ」と叫び、悠々と走り出しました。それを 聞いたウサギが折り返してもう一回カメを追いかけること になりました。この結果が数回繰り返されたら、ウサギは カメを追い越すたびに、減速し、進行方向を疑い始めるよ うになるのでしょう。

「トヨタプリウスのハイブリッドもすでに20年前の技術 で、この間大きな進化もなく、これから電気自動車の時代 だ」と、直近欧州勢自動車メーカーのこのマーケティング 大合唱を連想すると、「なぜ新興国自動車メーカーが近 隣の日本ではなく、遠い存在の欧州との共進化を選ぶよ うになったのか」の答えが次第に浮き上がります。次に潮 流に付きたいからです。

ある種「愚直」を「是」とする日本環境に研究を積み重 ねてきた私にとって、今回の留学は、研究の深堀りできる アジアにするのか、それとも「よそ見」ができる欧州にする のかは一瞬の悩みでした。振り返ってみると後者にして、 若手の私にとって本当によくて、収穫に満ちた貴重な経験 となりました。この機会を借りて色々お世話になった大学 及び職場の皆さんに感謝を申し上げます。感謝、感謝!

(経済学部 国際経済学科 准教授)

海外留学制度を利用した米国臨床研究留学記載之前

この度、平成28年度の長期留学に選出して頂き、2016年4月から約1年間、米国へ海外留学をさせて頂きましたので報告させてもらいます。私は、前職までは病院で勤務する臨床医、いわゆる"お医者さん"として勤務しておりました。平行して研究活動を行っていたことが幸いして、2013年度から本学工学部機械工学科にご縁があり、着任いたしまして、医学と工学の接点となるような研究を学生に教育できるよう、医工学研究室を担当しております。そんな経緯のため、タイトルに"臨床"というキーワードが入っております。

長期、短期留学制度というものが、本学にあることは、私が本学に着任しました2013年の時点では知りませんでした。およそ10年前の2008年10月から1年ドイツ、アーヘンに留学(アーヘン工科大学の医工学研究関連の施設)したことのある自分としては、もうそんな機会はないだろうと思っていました。たまたま着任した年の秋に行われました、韓国での本学の現地入試に試験監督をしにいった際に、そういった制度があることを知ったのでした。ご一緒させてもらいました、本学経済学部経済学科の韓福相教授からそのお話を聞き(韓先生は2回いったことがある、とおっしゃっていました)、興味をもったのがきっかけでした。着任当初で大学の制度等ほとんどわかっていなかった時でしたので、この出会いにはとても感謝しております(選出後に韓先生にお伝えしたほどです)。

もう一つ運がよかったのは、留学先選定のためのつながりを既に外にもっていたということだと思います。前職の際に、日本整形外科学会・米国整形外科学会共同主催のトラベルフェローの2013年度の選考に最小学年で選出され、1ヶ月の内にアメリカの西海岸を中心とした臨床・研究施設11施設を訪問するという機会を頂いておりました。著名な大学の医師および研究者とつながりをもてていたことがあって、申請時点の段階で、"どこの何の先生のところへいき留学活動をするのか"という計画書を提出しないといけなかったのですが、なんとかなりました。こうして、2016年4月から12月までの9ヶ月を、ユタ州ソ

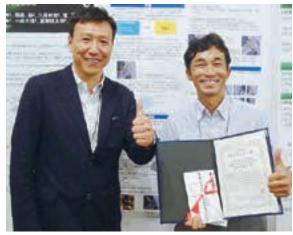
ルトレイクシティにあるユタ大学の整形外科センターで、2017年1月から3月の3ヶ月をカリフォルニア州のサンディエゴにある、スクリプス研究所にいくことができたのでした。続いてこれら2つを分けて紹介していきたいと思います。

ユタ大学整形外科センターでは、主に2人の先生に師事しました。一人はAoki Kenji Stephen先生で、スポーツ外科がご専門で、股関節鏡手術の第一人者の一人です。



▲Aoki先生(右)と著者(左)

先行している欧米であっても、股関節疾患に "FemoroAcetabular Impingement"という疾患概念が 2003年にうまれ、そのための診断・治療をこれからやっ ていくという状況でした。少し遅れた日本でも、そういっ た治療が行われていることが認識され、少しずつは行わ れている状況になってきましたが、まだまだ明らかにしな いといけないことがたくさんある状況でした。同じ疾患概 念であっても、欧米と日本では治療方針が同じにならない という意見もあり、混沌としてしまう状況をなんとか払拭 したいという気持ちが自分の中に芽生えておりました。な ので、手術・外来を見学するという"見習い(笑)"的立場 で、きちんとAoki先生の股関節患者の診断方法、治療方 法、手術手技などをマスターすることにしようと考えまし た。ここで得られた知見を、必ずや帰国後の日本で役に立 たせようと思い、自分の研究分野の一つである、画像解析 の研究を行うことにしました。欧米の股関節疾患のほとん どは、若年期の運動負荷によって生じた骨頭変形が原因 で、運動時、大腿骨頭の受け皿(おわんのような形)となる 骨盤側の寛骨臼という部分と衝突することが言われてい ました。一方、日本ではもともと寛骨臼の形成不全で、骨 頭を覆えていない部分の荷重負荷が問題とされていまし た。しかし、上記の画像解析によって、寛骨臼が形成不全 の患者でも、骨頭が寛骨臼に衝突していることを明らかに しました。つまり、現在欧米で行われている診断・治療体 系は、日本においても参考にできることが明らかになった のです。この研究は、2017年9月2日に開催された第13 回日本股関節鏡研究会で優秀ポスター賞に選ばれまし た。



▲第13回日本股関筋研究会での優秀ポスター賞受賞

Aoki先生とは、他にも日本では行えない研究をするこ とができました。それは、新鮮屍体組織を用いた実験研 究です。日本では屍体組織を用いた実験を行う際に、ホル マリンによって固定されたものしか使用できません。しか し、欧米では死亡後凍結させて実験の際に解凍して実験 を行うことが可能です。股関節鏡手術において、手術処置 を行う関節唇、軟骨といった軟部組織における力学評価 を行う目的で、計測機器を開発したのですが、それを実際 の患者に使用する場合に、評価に値するかどうか、上記 のような新鮮凍結させた屍体組織で実験を行うことが一 般的なのですが、それをユタ大学でやってもらえないか依 頼しました。一般的に留学での研究というのは師事した

先生のアイディアで行われることが多いのですが、自分で 企画した研究を留学先で実行に移せたのは非常に貴重 な機会でした。この結果は、10月に行われる、国際股関 節鏡学会や日本股関節学会で発表を行うことにしていま す。行った研究はもう一つありました。手術見学にて手術 手技を見ていた際に思いついたアイディアで、特許の出願 を行うことができました。股関節鏡手術において、上述の 変形した骨頭というのは、もとの球形に近づけるよう、変 形部分を、球形のドリルで掘削するのですが、技術的に難 しいことから、トレーニングシステムがあればいいと思った のですが、そういったものは存在していなかったので、作 成することにしたのでした。

ユタ大学では、Aoki先生だけでなく、工学者である Andrew Edward Anderson氏とも一緒に研究を行い ました。ユタ大学整形外科センターでは、その施設内に 工学研究者がラボをもち、研究を行っており、いつも臨床 医と活発な交流がなされています。Anderson氏もその 一人で、医療画像から3次元モデルを作成すること、また それをリアルタイムな透視画像で重ね合わせる手法で動 作解析を得意としていました。ここで作成された3次元モ デルを用いたシミュレーション研究を行いました。今まで も各患者の足がどれだけ曲がるかというシミュレーショ ン研究はいろんな施設でされているのですが、骨同士の 衝突のみしか評価しておらず、関節唇のような軟部組織 が含まれた3次元モデルのシミュレーションはされていな かったので、それを行い、新知見を得ることができました。

今までのシミュレーション で得られた値とは20度違う ことが明らかとなったので す。この研究は既に今年開 催された米国整形外科基 礎研究学術集会や国際コン ピュータ支援整形外科学会 などで発表を行っています。



▲股関節動作シミュレーション

このようにユタ大学では臨床ないしそれに近い分野で の研究活動を行いましたが、サンディエゴのスクリプス研 究所では、基礎的な研究について学びました。組織工学とか再生医工学とか言われている領域で、新しく臓器を作り出せるかという"再生医療"に関わる研究を行っている Darryl D'Lima氏に師事しました。丁度3Dプリンタの技術で、手術ガイドを作成した経験もあって、次なるトピックは3Dバイオプリンタであると思い、その勉強をしたいとコンタクトをとっておりました。いろんなタイプのバイオプリンタの研究をしており、その1つがたまたま自分で購入し



▲研究室で購入した3Dバイオプリンタ

ようと検討していたものであったので、その可能性を確認 するといったことができました。現在、自分の研究室にも1 つバイオプリンタを用意し、再生医工学の研究をまさに始 めるといった状態にあります。

先端技術の研究や、先端技術を用いた臨床における疑問点を解決する研究を行うことができた一方で、家内、6歳の娘、4歳の息子も帯同する留学でしたので、週末は家族で国立公園にいくなど、満喫しました。また、本来ならば外国に溶け込むといったことが大事ではある一方で、母国語でコミュニケーションがとれるふれあいも大事であると思うのですが、いく先々で日本人のコミュニティにも助けられました。子供たちのつながりによって開催されたハロウィンやクリスマスの催しも大変有難いものでした。

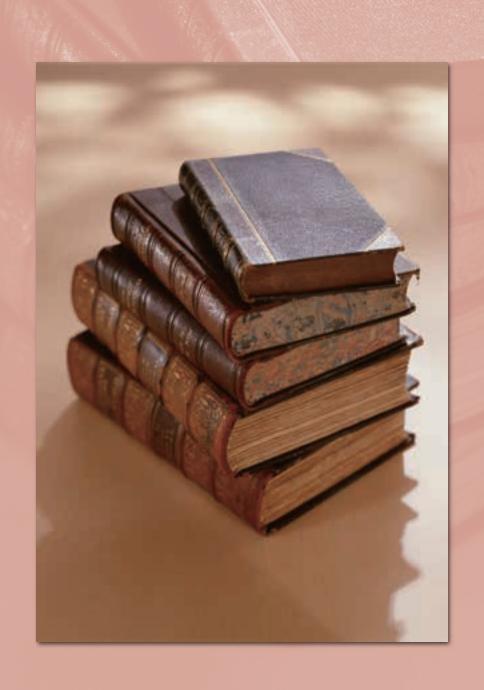
駆け足にはなりましたが、不在にした1年間で多くのことを吸収できたことをお伝えさせて頂きました。これを糧に今後も一層大学に貢献できたらと考えておりますので、今後ともご指導・ご鞭撻を宜しくお願いもうしあげます。

(工学部 機械工学科 医工学研究室 准教授)



▲平成29年度 写真・イラストコンテスト(写真部門)銀賞受賞作品 『夕焼けに包まれる学内』 吉向 宏恵(デザイン工学部 情報システム学科)

学術研究書出版助成本の概要



変化を生きながら変化を創る一新しい社会変動論への試み

北野 雄士

私たちは何かがきっかけになって、自己の位置づけや集 団のありようの変化を感じたり、社会の見方を変えたりす る。内と外の変化を生きるうちに、新しい発想、行動様式、 共同性を生み出すことがある。私たちは変化を生きながら 変化を創っている。

はるか昔から、社会のある変化を感じ取って、変化の 原因、意味、行方、対応の仕方を考える人がいた。近代に なっても、そのような営みは続けられた。社会の変化を説 明しようとした主な理論としては、唯物史観、M.ヴェー バーの変動論、近代化論、世界システム論、グローバル化 論がある。

本書はこのような特定の理論的な立場に立たずに、変 化を生きながら変化を創っている人々の営み――変動に 関する研究も含む――を記述し、その意味を考察したも のである。各章は様々な局面の社会の変化を、専門の社 会学や社会哲学の立場から論じている。どの章を読んで も、登場する人々の言説や行動、あるいはそれを取り上げ る執筆者の姿勢の根底に、社会はこのように変化してほ しいという夢が感じられる。「エピローグ」は、社会の変化 に対する人々――社会変動論の提唱者も含む――の夢 が社会変動に与える影響力に着眼している。

各章の執筆者は、編者の他、本学の専任教員である曽 我千亜紀(国際学部)、菊池真理(経済学部)、川田美紀 (デザイン工学部)、元専任教員の西川知亨、現非常勤 講師の山本哲司、岡尾将秀、元非常勤講師の太田美帆、 景山佳代子、内海博文、研究者仲間の安元佐織である。

本書は以下のように構成されている。まず、「プロロー グ」は坂本龍馬とA.トクヴィルの生き方と思想を通じて、 人間と社会変動の関係を考えた上で、各章の概要を紹介 している。

第1部「変化する社会を生きる」は人々がどのように変 化を生きてきたかを描いている。各章が論じている変化の 領域は、被差別経験者の差別との出会い、都市近郊の宗 教施設における信仰活動、農業を通じた土地と人々の関 わり、日本のステップファミリーにおける継子の成育環境、 「百寿者」を介護している高齢者の意識である。

第2部「社会の変化を創り出す」では、執筆者は各自の テーマについて、人々がどのような変化を創ろうとしてき たか、あるいは創ってきたか、今後どのような変化が求め られているのかを明らかにしようとしている。各章のテー マは、幕末武士の改革運動、行政広報研究にみる行政と 市民の関係形成の変遷、貧困対抗運動、原発反対運動と 地域メディアの関係、サイバースペースにおける個と集合 の両立である。以上の10章の論考は第1部と第2部に分 けられているが、「変化を生きる」と「変化を創る」のどちら にも関わっている。

第3部「新しい社会変動論の可能性」(第11章)は、グ ローバル化論に焦点をしぼり、「ゾーン(地帯)」における 内外との相互作用によるハイブリッド化という観点から、 グローバル化という社会変動を捉えようとする試みであ

「エピローグ」は、社会の変化という夢が社会変動に与 える影響力に着目して、社会変動と社会変動論の関係そ れ自体を問い直し、社会変動論の新たなあり方を提示し たものである。

刊行に際し、大阪産業大学学会から学術研究書の出 版助成をしていただいた。記して、学会と関係各位に深く 感謝したい。

(国際学部 国際学科 教授)

日中大学院生学術フォーラム論文集『東アジアにおけるグローバル化の諸相』 古谷 眞介

懸案であった日中大学院生学術フォーラムの論文集 を、2017年2月に刊行することが出来た。慣例に従って、 本論文集の内容とその評価、そして刊行作業において生 じた出来事について書き記そう。

本論文集は、社会科学分野の5つの論文をおさめた第 1部、そして文学・言語学の2つの論文をおさめた第2部 からなっている。簡単に各章の概要を紹介しよう。第1章 と第2章は、企業内部に焦点をあわせた研究である。第1 章では、中国の自動車メーカーである第一汽車を対象と し、その技術開発能力に焦点をあて、第一汽車の技術開 発制度がインフォーマルな組織・制度・慣行によって、 その技術開発体制を正しく機能させていないことを明ら かにしている。第2章は、中国沿海部に進出した日系中小 企業の人事評価制度の事例研究である。中国に進出した 電気機器産業のサプライヤK社で導入された人事評価制 度の実態と特質を1次資料にもとづいて明らかにしてい る。なお本章は、大阪市立大学『季刊 経済研究』第47巻 1-2号に掲載された論文「在中国日系中小企業における 労務管理の変容 ――電気機械産業の事例分析」を、若 干加筆・修正の上、再掲載したものである。第3章は、企 業内部から目を転じて、その外部にある労働市場の問題、 とくに外国人の労働問題を考察している。日本政府が推 進している高度外国人材の候補生と考えられている留学 生が、いつのまにか、非正規雇用の単純労働者として受け 入れの歯車にされている実態を指摘し、高度外国人材受 け入れ政策の矛盾、あるいは意図せざる結果を厳しく批 判している。第4章は、所得格差と主観的幸福の関係を経 済学の立場から考察している。とくに、人々が認識してい る所得格差が主観的幸福とどのような関係があるかを明 らかにすることこそが、重要な課題であると主張している。 そして第5章では、世界各地に離散してしまった民族の子 供たちのアイデンティティに関する社会学からの考察であ る。日本、中国、ロシアのコリアン・ディアスポラの子ども と韓国の子どもを対象に毎年開かれる「オリニ希望学校」 を事例に取り上げて、その子供たちの体験のなかで感じ

る「民族」と「葛藤」の要素に注目し、「ネーション・アイデ ンティティ」の変容過程について考察している。

つぎに第2部の文学と言語学の論文を紹介しよう。まず第6章は、日中の文学作品に描かれた楊貴妃のイメージを比較し、考察することで、日本文学に描かれた楊貴妃のイメージを明らかにし、そのイメージから導き出される精神世界の解明を試みている。第7章は、日本語のカタカナ表記に関する言語学の研究である。現代日本語は同じ単語が漢字、ひらがな、カタカナで、意味の違いとコンテクストによっての使い分けがあるようにみえる。その点に注目し、カタカナの意味の違いとコンテクストによる使い分けに関するルールを解明しようとしている。日本で放送された26本のバラエティ番組において、表示されたテロップの中から、非外来語のカタカナ表記の単語を集積し、使用実態を観察し、そしてその特徴について考察している。

以上が各章の概要紹介である。一瞥して分かるとおり、本論文集は、幅広い分野の論文からなっている。この論文集をみた幾人は、ホッチキスでとめたものといった感想をもったようだ。あるいは、アリバイづくりのための論文集との感想をもつ人もいたようだ。そのような厳しい感想があるが、大学院生の研究活動を活字にしたことは、有意義なものだとの評価ももらっている。いずれにしても、編集者としても、厳しい感想については重々承知している。この点については、今後の日中大学院生学術フォーラムで改善し、その厳しい評価を払拭したいと考えている。

最後に、編集作業の驚いた出来事について、いくつか書き記しておこう。一つは、初稿の校正の時である。国内外の大学院生を相手にして、編集作業を進めることは、大変だろうと考えていた。事実、初稿の校正の時に、ある人は、PDFの編集ソフトをつかって、ファイルに直接加筆・修正してきた。それらの箇所については、黒字のままとなっており、どこを修正したのかが、分からなかった。他の何名かは、入稿用原稿として私に送ったMS-WORDファイルに加筆・修正したものを私に送り、「校正です」と言ってきた。それも加筆・修正部分は全て黒字であった。確かに、丁

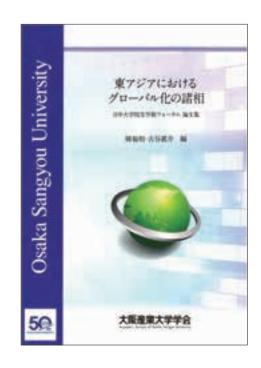
寧な指示をしなかった私にも落ち度があると思いながら も、彼ないし彼女たちには、加筆・修正箇所を明示しない と、校正にならないから、それらの箇所を赤字で示すよう に依頼することとなった。

さらにもう一つである。私は、なんとか初稿の校正をと りまとめたファイルを印刷業者のサーバにアップした。し ばらくして、印刷業者から、「WORDファイルで入稿して下 さい」という連絡があった。私は、何のことなのか、分から なかった。21世紀となり、ゲラ刷りに朱ペンで校正する時 代は終わり、時代に取り残されたのかもしれない、と思っ た。そこで経済学部の同僚に聞いてみた。彼らは、口を揃 えて、WORDファイルで入稿してしまっては、「校正になっ ていない」と答えが返ってきた。どうやら、私は、時代に取 り残されていなかったようだ。一安心した。

今思い出してみれば、印刷業者は、WORDファイルに よる入稿が前提ということを強調していた。どうやら、その 言葉が意味するところは、校正作業は、われわれがやれと 言うことだったようだ。

うえの2つは、いずれも報連相の問題である。人に仕事

をお願いすると言うことは、大変なことである。そのこと を、改めて経験した。同じ轍を踏まないようにしたい。



(大阪産業大学大学院 経済学研究科 准教授)

学会主催事業



新入生歓迎企画 入学宣誓式プロジェクトを終えて

学生自治会会長 澤崎 巧二

この新入生歓迎企画「入学宣誓式プロジェクト」につい て初めてお聞きしたのは、学長室での面談のときでした。 その際は、どんな企画(プロジェクト)にすればいいのか、 残り数ヶ月でどれだけのことができるのだろうかという期 待のような気持ちがありました。

そこから独立団体の代表者などを中心に学生の有志 を募り、プロジェクトがスタートしました。この企画は、新 入生を "全学生で新入生を迎え入れる"という大きな目的 を果たすべく、学生の有志同士で企画案を持ちより、幾度 の会議などでより良くしていきました。



企画案として最終 的に決定したのは、 写真パネル(大型の 写真パネル、写真の フレーム)の制作と展 示、入学宣誓式当日 での歓迎メッセージ の発表でした。"全



学生"というのは、本学に在学している全員のことで、新入 生を本学の一員として"歓迎"しているというのを何かしら のメッセージとして伝えられるよう、各団体や各部署など に写真の提供やメッセージ発表者を募りました。しかし、 メッセージの発表者は部活動やサークルに所属していな い学生に募集する時間に費やすよりも、内容を濃いもの にするため、どこかの団体に所属している学生にしていた だくことにしました。

このプロジェクトを通して、一番大切なのはやはり人と のコミュニケーションだということが改めて実感しました。 なぜなら、新入生(人)を相手に、我々在学生(人)同士が 意見を出し合い、新入生を迎え入れるわけです。つまり、

普段のつながりや関わりのない部署などにも、より密なコ ミュニケーションを取る必要がありました。プロジェクト が始動してはじめに決めた目的「入学宣誓式において、新 入生の目線になり、「大産大のここを知らないともったい ない!」について、在学生からメッセージを伝え、大学の魅 力を知ってもらう。またプロジェクトに携わる学生は、この 経験を通じて成長し、他の企画に携わることへの第一歩 とする。」を達成するためには、コミュニケーションは必要 不可欠でした。

"Active Learning"の1つとして具体化され、始動した このプロジェクトは関わった人全てにそれぞれ多様な感 じたことはもちろん、新入生からの視点でも感じたことが あると思います。それを次につなげるというのが、プロジェ クトリーダーを務めた私の役目でもあり、前述の目的を達 成するためにプロジェクトに携わった学生にも同じことが 言えると思います。

私は、4回生ですので間もなく本学を卒業しますが、 後輩(特に、4月に入学してきた新入生)に同じような企画 (プロジェクト)を実施して欲しいというのを伝えていま



最後になりますが、自分がこうしてプロジェクトに携わ り、自己成長につながる達成感や充実感などが実感できる 環境とこのプロジェクトにご支援やご援助、ご協力していた だいた方々に御礼申し上げます。ありがとうございました。

(経済学部 国際経済学科)

第4回日中大学院生学術フォーラム&アジア共同体センター国際シンポジウム「グローバル化とその反発」

古谷 眞介 (ACRC 国際シンポジウム & 第4回日中大学院生学術フォーラム 幹事)

第4回日中大学院生学術フォーラム(以下、フォーラムと略記)とアジア共同体センター(以下、ACRCと略記)の国際シンポジウムが、2017年12月9日、大阪産業大学大東キャンパスにおいて、テーマ「グローバル化とその反発」で共同開催された。

フォーラムおよびACRCについては、経済学部およびこれまで共同で開催してきた大学関係者はともかく、社会的には広く認知されているわけではない。そこで簡単にフォーラムとACRCについて紹介しよう。まずフォーラムは、2014年10月に第1回が山東師範大学にて開催された。フォーラムの主たる目的は、日中の大学院生にたいして、日頃の研究成果発表の場を提供することである。とくに日頃の研究について報告し、国内外の研究者からコメントをもらい、議論することで、大学院生の研究に弾みをつけようと考えている。さらに優れた報告については、論文を執筆してもらい、論文集を出版することになっている。以上のような意図から、企画・運営されているフォーラムである。その後第2回大会が本学大東キャンパスにて、第3回大会が河南省開封市の河南大学経済学院にて開催された。

ACRCについては、文部科学省の平成17年度私立大学学術研究高度化推進事業のオープンリサーチセンター整備事業に採択されたことを契機に、2005年4月に設置された研究センターである。その目的は、アジアの経済統合およびグローバリゼーションが進む中でのアジアの文化・社会の変容などに関する国際的・学際的研究を推進することにある。文部科学省からの助成が終わった後も、研究は継続されている。今回のシンポジウムで25回目の開催となり、息の長い活動となっている。

さて今回のフォーラムとACRC国際シンポジウムには、104名もの国内外の大学院生と教員が参加した。過去最多の参加者であった。詳しくは、次のとおりである。まずフォーラムには、天津理工大学管理学院と国際工商学院から24名、上海外国語大学から8名、雲南大学から4名、河南大学から2名、大阪産業大学から8名、そして大阪市

立大学、関西学院大学、名古屋大学からそれぞれ1名の 大学院生が参加した。文学、言語学、社会学、経済学など の分野毎に10教室に分かれて報告を行った。とくに、大 阪市立大学の住田弘之「日中旅行企業の事業戦略の変 容 —HISと春秋航空を例に挙げて一」、上海外国語大学 の劉若曦「テアル文の存在表現機能について」、同大学の 楊亜然「童話作品<時計のない村>から見る小川未明の <回帰志向>」、ならびに本学大学院経済学研究科(天 津理工大学国際工商学院 講師)の邸晓熠「機会の均等 と主観的幸福の関係についての実証研究」などの優れた 報告があった。

ACRCの国際シンポジウムについては、まず元ACRC センター長である竹内常善氏が「グローバル化戦略とア ジア社会の課題;成長と既得権益、多様性と混沌」とい うタイトルで基調講演を行った。そしてその後、「グローバ リゼーションとその反発」、「日系企業と植民地ー台湾製 糖業を事例に一」、ならびに「中国・東アジア」の3つの分 科会に分かれて報告をおこなった。「グローバリゼーショ ンとその反発」では権正基(又石大学)、鄭承衍(仁荷大 学)、キティ・リムスクル(埼玉大学)、郑妍(河南大学)、 臧学英(天津行政学院)、楊紅雄(天津理工大学)、なら びに李勇(天津行政学院)、「日系企業と植民地ー台湾製 糖業を事例に-」では齊藤直(フェリス女学院大学)、杉 山裕(大阪経済法科大学)、ならびに湊照宏(本学経済学 部)、そして「中国・東アジア」、加島潤(横浜国立大学)、 門闖(雲南大学)、田島俊雄(本学経済学部)、ならびに加 藤道也(本学経済学部)が報告を行った。いずれの会場 でも活発な議論がなされ、裏方は嬉しい悲鳴を上げてい た。

最後に、フォーラムとACRC国際シンポジウムの共同 開催にあたっては、大阪産業大学学会、孔子学院、ならび に天津理工大学から助成を受けた。とくに大阪産業大学 学会常任委員長の東良徳一氏と事務局の髙木裕子氏、 天津理工大学の王京濱氏と邸晓熠氏、本学孔子学院の 張黎氏、康林氏、事務局の高橋宣昭、トラベル日本の中井 悠起氏と陳裕興氏、そして本学経済学部事務室の樋口吉 実氏、武井由佳氏、三浦三恵氏、本学経済学部と大学院 経済学研究科の学生たちには、開催にあたってのロジス ティック面では、大変お世話になった。彼らと彼女たちの 尽力が無ければ、本フォーラムとACRC国際シンポジウム を開催することは出来なかった。感謝の言葉を記したい。

(経済学部 経済学科 准教授)





経済学部研究会開催報告書

李 澤建

経済学部研究会は、大阪産業大学学会の企画関連規程に準じ、参加者全員で質疑応答を行い、教員間の研究情報の共有化を図るという趣旨に基づき、2010年から開催されてきた研究会です。新しく赴任してきた先生の研究紹介の場や、海外留学で帰国された先生の正解報告の場などで、新鮮な刺激を教員間で共有できるように運営しています。時には、今年度限りで退職する先生の記念講義として、ご登壇していただくこともあります。学期中では、毎月1度のペースで6回程度の開催を目指しています。

経済学部研究会では、上記のような学内の教員のみならず学外からも各分野の専門家を招いて議論を重ねながら、知識の共有を図っています。経済学は身の回りで起こる社会現象を分析することに主眼があるので、実際に聞

いてみると新入生の皆さんにも十分に理解できるものなのです。

参加者は経済学部の教員だけではなく、学部生・大学院生を含めて公開している研究会です。もちろん参加費は無料で、予約も不要です。いつもは講義でしか会わない先生たちの研究者としての側面が見られるのも面白い点の一つです。

開催日時や会場については、本館6階の経済学部事務 室前に掲示することで、周知させています。皆さんもぜひ 経済学部研究会にお気軽に参加して、知識をブラッシュ アップしていってください。

(経済学部 国際経済学科)





▲経済学部研究会の様子



▲平成29年度 写真・イラストコンテスト(イラストデザイン部門)銅賞受賞作品 『明日の私』 重村 妃南(経済学部)

学会後援事業



アメリカスポーツ医学会(ACSM)EIM on Campus表彰式に出席して

嶋田 愛・佐藤 真治

はじめに

2017年5月30日~6月3日の5日間、アメリカ合衆国 コロラド州デンバーにおいて、第64回アメリカスポーツ医 学会(ACSM)が開催された。我々は、そこで開かれたEIM (Exercise Is Medicine) on Campus表彰式に招か れ、受賞スピーチを仰せつかった。ここでは、受賞に至った 経緯と表彰式の様子(写真1)を報告する。

ACSMEEIM on Campus

ACSMは、会員数5万人を超える世界有数のスポー ツ医学分野の学会である。ACSMでは、8年前よりEIM (Exercise Is Medicine)プロジェクトに力を入れてい る。EIMの目標は、運動療法を普及し、地域で歩く人を増 やし、「運動を病気の治療と予防に役立てよう」というメッ セージ(EIM Solution)を世界中で広げることである。す でに40以上の国と地域が本プロジェクトに参加してお り、日本でも来年(2018年)早々にEIM Japanセンター が設立される予定である。

EIMプロジェクトの柱の一つは、大学生たちにEIM Solutionを広げるEIM on Campus活動である。EIM on Campusでは、学生が中心となって、地域の医療機 関と連携し地域に歩く人を増やすことが求められる。そし て、活動が目覚ましかった大学は、年に一回ACSM学術 大会の会期中に表彰される。我々大阪産業大学は、今回 アジアで初めて銅賞を受賞することができた(香港大学 も今年度銀賞を受賞)。

受賞に至った経緯

我々が最初にEIM on Campus 活動の存在を知った のは、昨年(2016年)ボストンで行われたACSM学術集 会の会場であった。たまたま目にしたEIM on Campus の表彰式の煌びやかさに触発され、今度は私自身がこの 場で表彰されたいと思い、帰国後すぐに大阪産業大学で EIM on Campusの活動を開始した。

まず始めたことは、大学の中に賛同者を増やすことで

ある。我々は、これまでもプロジェクト共育(慢性疾患患 者をスポーツで支えるプロジェクト)として心疾患患者の スポーツ教室を運営してきたが、それに加えて、身体活動 量を増やすことを共に楽しむ学生のつながり"チーム「歩 く人。」"を創った。そして、チーム「歩く人。」のメンバーが 中心となって、3カ月に一回地域の人と学生が公園を歩く "「歩く人。」in the Park" (大阪府公園協会と共催、写 真2)や一週間に一回地域の高齢者と学生が夜の街を歩 く"星空ウォーキング"(大東市と連携)を定期開催した。 チーム「歩く人。」のメンバーは、始めた当初10名程度で あったが、2017年10月時点で60名を超え、今も増え続

以上のような我々の活動がEIM幹部に評価され、今回 の受賞に至った。さらには、表彰式のオープニングスピー チを任された。

授賞式でのスピーチ

オープニングスピーチでは、①日本が抱える超高齢化と 健康寿命の現状、②高齢者の社会的孤立が進んでいるこ と、③歩くことを通じて高齢者の間に人のつながりが増し ていることなどを報告し、受賞に対しお礼を述べた。

慣れない英語での発表であったため、スピーチには身 振り手振りをつけたり、言葉に強弱をつけたり、活動場面 の動画を盛り込むなどの工夫をした。その結果、スピーチ の中盤で歓声や笑いが起き、スピーチが終わった後はス



▲写真1 表彰式での様子

タンディングオベーションで会場が包まれた。



▲写真2 「歩く人。」in the Parkの様子

最後に

私は、今回の経験を通じて、私の中に世界中の人と言 葉の壁を越えて交流できる可能性があることを発見し、自 分自身に対して自信が持てるようになった。また、日本の 超高齢化社会が世界各国から注目されていることを実感 し、我々の活動の重要性を改めて感じた。このような経験 を支えていただいた大阪産業大学学会に感謝するととも に、益々活動を積極的に行うことをお約束し、終わりにし たい。

> (人間環境学研究科 人間環境学専攻(大学院)・ スポーツ健康学部 スポーツ健康学科 教授)

第54回日本文芸学会全国大会報告

村田 好哉

第54回日本文芸学会全国大会が、6月24日(土)、25 日(日)の2日間にわたり本学において開催されました。日 本文芸学会は昭和38年に創立され、文芸学に基づいて 日本文学の学術的な研究を行う全国的な学会としては、 国内で唯一の学術団体です。大会当日は、会員はもとよ り、会員外の研究者の出席も多く見られ、日本や中国の 新進気鋭の研究者による近世から近・現代におよぶ日 本文学に関する発表に対して活発な質疑応答が行われ ました。大会2日目は会員の研究発表が中心ですが、例年 1日目の公開講演会は学会員に限定せず、会場校の教職 員、学生や広く一般市民にも開放しており、地域社会への 日本文学の普及・啓発を強く考慮しております。

今回は、円地文子に関しての講演が行われました。円 地文子は没後もテレビや映画で取り上げられるなど、いま だに国民的な高い人気を保つ作家です。野口裕子新居浜 工業高等専門学校名誉教授による公開講演会「円地文 子ーその生涯と作品」には、研究者のみならず地元大東 市民の方も多数出席され、円地研究の第一人者である野 口氏の長年の経験と研鑽に基づいた興味深い講話にみ なさん終始、熱心に耳を傾けておられました。今回、気鋭 の講師による最新の研究成果が発表される全国大会が 開催されたことにより、本学の日本文学、日本文化に関わ る今後の教育、学術研究の向上に意義が認められます。 加えて講演会の実施により本学の文化的、学術的な面で の地域社会への貢献においても効果が見込まれます。

なお、このたび大会開催にあたり大阪産業大学学会よ りご後援をいただきましたことをここに記して、謝意を表 する次第です。

記

開催日: 平成29年6月24日(土)、25日(日)2日間 大会1日日

会場 大阪産業大学 大東キャンパス 16606教室

1. 開会の辞(午後1時~1時10分)

代表理事 関西学院大学名誉教授 細川正義

2. 研究発表(午後1時20分~2時40分)

司会:奥田雅則(関西学院大学非常勤講師)

①遠藤真央(関西学院大学大学院)

「北条団水『団袋』考」

②藤田祐史(名古屋大学大学院)

「古井由吉『野川』論-小説と連句-」

3. 公開講演会(午後3時~4時30分)

司会: 箕野聡子(神戸海星女子学院大学教授)

講演「円地文子ーその生涯と作品」

新居浜工業高等専門学校名誉教授 野口裕子氏

大会2日目

会場 大阪産業大学 梅田サテライト・キャンパス レクチャールームAB

1. 研究発表(午前10時~11時20分)

司会:足立直子(広島女学院大学准教授)

③孫 莉(西安交通大学大学院)

「壁化・蛹化・蝶化ー安部公房「S・カルマ氏の犯罪」 論一」

④趙 暁妮(西安交通大学大学院)

「井上靖『孔子』論ー中国人をも魅了する源泉をめ ぐってー」

2. 研究発表(午後1時~3時)

司会:深町博史(立命館大学非常勤講師)

⑤松本滋恵(広島女学院大学大学院)

「栗原貞子「ヒロシマというとき」論ー被害と加害の 複合的自覚一」

⑥山田紗也子(関西学院大学大学院)

「水村美苗『母の遺産 新聞小説』論-変容する遺 産の意味ー」

3. 閉会の辞

常任理事 関西学院大学教授 森田雅也

(国際学部 国際学科 教授)

熊本地震復興支援チャリティ講演会/東北復興支援活動

宮崎 正志

【熊本地震復興支援チャリティ講演会】

2016年4月に熊本地震が起こり、1年半が経った今も 避難生活を余儀なくされている方々が4万人以上おられ ます。そんな中、命の尊さ、人を思いやる心、現代社会での 生き方をお互いが見つめ直し、一人でも多くの方々が被 災地の現状を知り、今尚以前のような日常生活には戻れ ない現実の中、懸命に生きておられる方々に、心を寄せ、 今後の復興に願いを込めて今回の講演会を企画いたしま した。また、2011年の東日本大震災以降、様々な形で復 興支援活動を続けて参りましたが、これまで延べ250名 以上の硬式野球部員が宮城県・福島県・広島県・兵 庫県などでボランティア活動を続けております。今回は、 教育現場を預かる小・中・高校の教員や本学職員・教員、 一般学生、大東市の企業、地元住民にも呼びかけ、一人 でも多くの方々にご参加いただき、ご自身も被災されなが ら、今も被災地の厳しい状況と向き合い、教育の現場で 生徒のため、現地の被災者のためにご尽力されておられ ます高校教師の埜口経司先生に「震災から1年経った熊 本の今」と題しての現状報告、更にご自身の経験、体験、 出会い、生き方を通して、これからの日本の教育について 考える機会にしていただければという思いでお越しいただ きました。埜口先生におかれましては、震災当時、ご家庭 を顧みず、道路事情が悪い中、生徒の安否確認のために 走り回り、生徒の無事を確認できた後は、避難所である益 城町総合体育館での支援を続けておられました。物資だ けではなく、心のケアにも積極的に取り組まれ、被災者の 方々の支えとなっておられました。生徒の中には実家が崩 壊し、避難所生活を余儀なくされた生徒もいたと伺いま した。先の見えない中でもお互いが力を合わせ、助け合う 輪が広がっていき、子供たちが自ら避難所のお年寄りを 気遣う姿があちらこちらで見られたそうです。その子供た ちのエネルギーに元気をいただいた被災者の方も多かっ たと伺い、改めて子供たちの無限の可能性を感じずには いられませんでした。またもう御一方の講演者の元沖縄 少年院法務教官の武藤杜夫先生に、今回のこの会の趣 旨をお話させていただきましたところ、是非協力をしたいというありがたいお返事をいただきました。講演では「なぜ、少年院で人生が変わるのか」と題して、当時の沖縄少年院の卒業生の宮平魁樹さん(24)と原琢哉さん(24)のお二人の卒業生と共に沖縄からお越しいただきました。二人の卒業生は、武藤先生が赴任して間もない頃の沖縄少年院が荒れていた時代の教え子たちで、特に、衝突を繰り返しながら少年院時代を過ごしましたが、卒業後は立派に社会人として更生され、今は家庭を持ち生活をされています。武藤先生は、この二人には一番苦労させられたと言われますが、ご自身が一番成長できたのも、この時期だったと語られていました。

最後に『自分が学んだ分しか相手は学ばない』『人を育てるには、常に自分が学び続けるしかない』…。そして、『一番手が掛かった二人と、こうして今繋がっているのも



▲元沖縄少年院法務教官 武藤杜夫先生



▲当時の沖縄少年院卒業生の原琢哉さん

不思議な感じがする』と笑顔で語られていたのが印象的 でした。そんな波乱万丈のその人生を通して今を懸命に 生きている熱い思い、行動力に、会場は感動の渦に包み 込まれ、涙する方も多数おられました。今回の講演会を通 じて、人との出会い、ご縁、繋がりが人を育て成長させるこ とを改めて学ばせていただきました。

【東北復興支援活動】

8月6日~11日、2011年の東日本大震災より復興支 援活動の一環として続けております東北遠征を実施いた しました。

福島県南相馬市でのボランティア活動

暑さ厳しい中での活動でしたが、ケガもなく予定通り実 施することができました。福島県は、まだまだ復興が進ん でおらず、現地に入りましても人がまばらな状態で、大阪 では考えられない異様な空気に包まれておりました。南 相馬市ボランティアセンターに到着後、松本センター長か ら訓示をいただき、南相馬市の現状、ボランティアの状況





をお伝えいただきました。この日は、依頼があった会社の 裏の草刈りでした。現場に着くと、そこは身長ほどに伸び た草が生い茂っており、先が見えない状態からのスタート でしたが、33名の学生たちはすぐに、それぞれ自分の役 割を決めて動き出しました。指示を出さずとも現地の状 況を通して自らが判断し、互いに協力しながら黙々と草刈 りを進めていきました。最初の1時間はなかなか進まない 感じでしたが、時間と共に要領を掴むと学生たちの作業 のスピードが加速していくのが分かりました。昼休憩の時 も、短時間で食事を済ませ、学生たちは誰に促されること なくすぐに活動を再開しておりました。午後からは更に草 を刈るスピードが上がり、15時の終了予定時刻にはほぼ 全部の草を刈り終えることができました。活動後には一気 に視界が広がり、風が心地よく通る状態に変わっており ました。そして松本センター長が活動後の現場を見て、学 生たちのエネルギーに驚いておられました。普段はなかな か経験することができない空間に身を置き、学生一人ひ とりが自分と向き合いながら活動する中で、野球とは違っ たチームとしての「一体感」を感じることができました。『で きる人が、できる時に、できる事をする』。これは震災当初 から南相馬市ボランティアセンターにずっと掲げてある言 葉です。大切なことは、現地に行くこともそうですが、現地 に行けない中でも被災地に心を寄せることだと改めて感 じました。

門脇小学校

海岸から800メートルしか離れていない被害の大きな 爪痕が残る門脇小学校で、震災当時校長をされておられ

た鈴木洋子先生が早 朝より現地に来ていた だき、震災当時の状況、 今の門脇地区の現状な どをお話しいただきま した。当初は、バスを降 りて旧門脇小学校の前 でお話を伺う予定でし たが、雨がひどく、急遽



バスの中で30分ほどお話を聴かせていただきました。震 災当日の厳しい状況を経験された鈴木先生ならではのお 話に学生たちは聴き入っておりました。復興という目に見 えないところでのご苦労を感じながらも、門脇地区を何と か立ち直らせようという強い熱意がお話されるそのお姿 から伝わって参りました。

大川小学校

震災当時73名の生徒と10名の教職員が犠牲となった 大川小学校では、当時小学校6年生の息子さんを亡くされた遺族会の佐藤和隆さんに案内役をしていただきました。佐藤さんの息子さんは、震災当時、大川小学校の6年生で野球が好きな野球少年だったそうで、中学校に入って野球をするのを非常に楽しみにされていたそうです。今



回本学の野球部員が大勢で訪れたことを大変喜んでいた だきました。また雨が降っていたこともあり、佐藤さんのお 計らいで普段は入ることができない校舎に入れていただ きました。当時の悲惨さがそのまま残る校舎内の何とも 言えない空間の中でのお話に心が痛みました。また震災 当日、校庭で津波が来るまでの51分間をどんな思いで子 供たちや先生方が待機していたのかと思うと本当にやり 切れない思いがいたしました。このような悲劇を風化させ ることなく伝えていくことも、このような経験をさせていた だいた我々の役目だと改めて感じました。今回の東北遠 征も4回目になりますが、学生たちが日々成長している中 で、東北の地においての感じ方も変わってきていると思い ます。復興支援活動は何年やれば良いというものではな く、報道も少なくなった今、現地に足を運びますと厳しい 現実を改めて感じますし、毎年の経験を通して継続してい かねばならないという使命感が強くなって参ります。学生 たちも、実際現地に足を運び経験することで多くのことを 感じ、勉強になると言います。こういった経験を通して、学 生たちが日常を大切にし、人としての正しい生き方をして いくことが被災地から学ぶことでもあるように思います。 そして将来、現地に足を運んだ経験は、次世代に伝えてい くという使命感に変わっていくはずです。「一人の百歩よ り百人の一歩」が大事だと改めて気づかせていただいた 東北遠征でした。学生たちは、出会い、ご縁、経験を通して 皆様に育てていただいていると実感いたしておりますし、 このような学生時代の経験を社会に出た時に真のリー ダーとして、将来の日本を背負って立つ覚悟ある人材に 育ってくれればと願っております。

(体育会 硬式野球部 監督)

「輪島朝市の見学、金箔貼り体験、およびゼミ合宿」報告書

酒井 博章

経営学部経営学科の酒井ゼミでは、輪島朝市の体験と ゼミ生の交流を目的として9月18日から20日にかけて石 川県に行きました。

一日目は輪島市の民宿海辺に宿泊しました。そこでお 絵かき伝言ゲームをして、ゼミのメンバーとの仲を深めま した。ゼミの授業中に話すことができなかった人とも交流 して、知らなかった一面や特技などが分かりより親しくな りました。また、先生も参加することによって先生と生徒 の仲がより深まりました。絵がうまい人や苦手な人がいま したが、全員が楽しんでいました。(大出・黒川)

旅館での夕食後、近くの足湯へ行きました。わいわい話 しながら歩いて行きました。足湯へ行くまでの街並みは普 段見ないような、レトロ調で風情がある雰囲気でした。留 学生にとって足湯は初めての体験の人が多く、無料で驚 いたようです。足湯が大きな円で座れるようになっており、 交流しやすいデザインとなっていました。足湯という、リ ラックスできる所でしたので、会話が弾みました。犬の足 湯もあり、それが目的で来ている現地の人と交流できまし た。(畑中・長戸・フォン)

その後、輪島キリコ会館前で御陣乗太鼓の実演があ

り、見学してきました。どこどこどこどこと心臓に響く太鼓 の音や男たちの気迫が心臓に直で伝わってくる。お面の 男が「やぁぁぁぁぁ!」と叫ぶとわたしの体は自然と身震い を始めました。その鬼気迫る演奏から目を離せなかった です。叩く所は皮の面だけではないのかと思っていました が、演奏を見て、太鼓にはそんな演奏法もあるのかと太鼓 に対する考え方が変わりました。(近藤・ティン)

二日目は朝から朝市に行きました。そこでは新鮮な魚 や海の幸がたくさん売られていました。それらを売ってい るのは愛想の良い高齢者たちで、しつこく声をかけて売り つけようとしてきました。1人のゼミ生の仲間がお面を2つ 買わされていました(笑)。朝市の一番奥には、ドラマの撮 影場所になった所や輪島ドラマ記念館がありました。歴 史ある朝市の様子を実際に目の当たりにし、雰囲気を知 ることができて、良い経験になりました。皆、ソフトクリー ムを食べたり、お面を購入してそれぞれ楽しく過ごしまし た。(代楊・伊東)

朝市から戻ってきた後、七尾フィッシャーマンズワーフ に行き、遊覧船に乗りました。船上でのみ感じることので きる海風やウミネコとの触れ合いは日常生活では体験



することのできないものでした。ウミネコへの餌やり体験では、餌である「かっぱえびせん」を手で与える者もいれば、口渡しで与える参加者もいて、とても楽しんでいました。 (荒井・松元・東口)

二日目の夜は能登千里浜の休暇村に宿泊しました。到着後、近くの海岸まで歩いて行き、日の入りをゼミの皆で見に行きました。日が落ちた後は豪華な夕食をとりました。料理には海が近いこともあり、海の幸が多くとても美味しかったです。その後は皆で花火をして、皆との親睦を深めることができました。また、宿泊先の温泉は露天風呂やサウナもあり、旅の疲れを癒せました。(安田・林・末神)

三日目の午前は金沢の箔一本店で金箔体験をしました。館内では金箔の歴史や、製作工程の説明を詳しく教えていただきました。そして、金箔体験では自分で好みのデザインを選び、お皿に約1ミリの金箔を貼りました。金箔はたいへん薄く、扱いが難しく、とても緊張しました。でも満足のいくお気に入りの一枚ができて、とても嬉しかったです。(東・布川)

輪島朝市の体験が第一目的ではありましたが、ゼミ生同士で仲良くなってもらうことも重要な目的でした。今回のゼミ合宿を通して、参加メンバー全員がゼミ合宿を楽しみ、仲良くなれたこと、また楽しい思い出を作れたことが一番の成果でした。(酒井)

15B804	ティンティンエイ	16B003	東ほのか
16B005	荒井宏紀	16B020	伊東優汰
16B051	大出雄斗	16B103	黒川大輔
16B121	近藤朋哉	16B151	末神澪
16B187	代揚	16B207	東口侑太郎
16B222	長戸友里	16B240	畑中今日子
16B248	林侑輝	16B258	フォンカーマン
16B259	布川祥子	16B287	松元凌
16B306	安田優哉		

(経営学部 経営学科 准教授)

学術講演会

第4次産業革命時代における経営・流通に関する特別学術講演 朴容寬



昨今、世界中がインターネットを通じて結ばれ、第3次 革命と言われたICTがさらに進化し、第4次産業革命とな り、インターネット・インダストリーによるマスカスタマ イゼーションやIoTによるビッグデータ活用に基づく新商 品、新サービスの提供が時流になろうとしている今日にお いて、いかに対応し、最適なマネジメントを組み込むことが できるかを中心に日韓共同学術講演会が2017年10月 13日に行われた。

講演の前半は、韓国の忠南大学校経商大学の副学長 である李炳采氏が「第4次産業革命の意義と韓国の対 応戦略」に関して、講演の後半は大阪産業大学大学院経 営・流通学研究科長である朴容寛氏が「第4次産業革命 時代における企業マネジメント」に関して講演を行い、同 テーマに関して意見交換及び質疑応答を行った。

李炳采氏は、まず、第4次産業革命をIoT、ビッグデー タ、AI、ロボット、3Dプリンティング等の新しい技術に よる急激的な産業革命として定義した。この産業革命に 対応して、韓国では大統領直属の委員会である「第4次 産業革命委員会」が2017年9月に設置され、産業支援 と技術支援を行っている。前者としてはスマートハウス、 自動車産業、航空産業、バイオヘルス、エネルギー新産 業、流通産業分野に集中投資し、後者としてはロボット、 スマート工場、VR(Virtual Reality: 仮想現実)、AR (Augmented Reality: 拡張現実)、半導体、ディスプ レイ、新素材等の技術分野を集中的に開発する戦略であ る。世界経済フォーラム2017では技術ルネサンス、分節 的革新、両極化及び気候変化・地域化という四つのシ ナリオを想定しているのに対して、韓国政府では規制改 革と労働配置転換政策を工夫している。規制改革は、セ キュリティとプライバシー、在職者に対するレントシーキン グ、諸規制に対するネガティブ・システム、スマート規制 増大等に対する政策である。労働配置転換は、2020年、 500万の仕事がなくなると予想されるので、新しいラッダ イト運動、再訓練・再教育・スキル向上・再教育、社会 保障制度等の諸問題に対する政策である。

朴容寛氏は、第4次産業革命時代における有力分野は 既に自動化が進んでいる製造業ではなく、遠隔医療、認 知症の高齢者介護、小売り、飲食、宿泊、運輸、物流、建 設、農業といった労働集約度が高い分野であり、ディープ ラーニング技術等によるAIのブレイクスルーで、様々なビ ジネスプロセスが大幅に自動化することを予想した。ま た、同氏は、IoT等によって集められたビッグデータをデー タマイニング、ディープラーニング等を通してAIがルール ベースで物事を認識し、単純作業等に関してはロボットが 自動的に処理する昨今の第4次産業革命時代には、従来 通りのマネジメントでは生き残り、勝ち抜くことができない ので、新しいマネジメントの革命が必要であることを強調 した。すなわち、IoT、ビッグデータ、AI、ロボット等とビジ ネスとの新結合をいかに効率的に行い、新しいモノ・サー ビス・ビジネスモデル・顧客創造を行い、激変する環境 の中で勝ち抜くことができ、新結合がもたらす変化にいか に迅速に対応し、マネジメント能力を高められるか等の 課題を従来とは根本的に異なる人事・組織管理、財務・ 総務管理、情報・開発管理、破壊的イノベーションやアソ シエーツ・リーダーシップ等を提案した。

(経営学部 経営学科 教授(大学院経営·流通学研究科長))

「体罰に頼らない指導をめざして」~日米の比較調査からみえてくるコーチングのあり方~ 成山 公一

スポーツ健康学部開設記念と学生諸君の視野を国際的に広げるねらいで、米国からDr. Graff-Haight先生を招き基調講演をお願いした。その後、国際的トレーナーとして活躍されているバスケユニバ日本代表チームマネージャー日暮先生と、コーチングにおける体罰問題の世界事情について意見交換してもらい、「体罰・暴力に頼らないスポーツ指導」の正しいあり方をグローバルな視野で学んでもらった。学生部共催、大阪産業大学学会の後援を得て国際講演会として盛大に開催できたことを厚くお礼申し上げます。

リンフィールド大学は、米国オレゴン州ポートランド市の北に位置し、パワフルな体育学部を所有していることで有名な大学である。ネットで検索するとLinfield College: The Power of a Small College, McMinnville ORと出てくるように、規模は小さくても各種体育会系スポーツチームはまさしくパワフルに活躍している。その代表的な存在が同大のアメリカンフットボール部で、リーグ62連覇という輝かしい実績と伝統があり、他大学の強豪チームを寄せ付けない。今回はそのヘッドコーチの指導手法を中心に話を進めてもらった。



講演から強く感じたのは、暴力・体罰の生まれる構造や、コーチ・監督としての品格のあり方は世界共通であるということ。しかし、米国では、選手を単にアスリートといわないで、常に「スチューデント・アスリート」という位置付けで対応していた。学生選手として、スポーツと勉学の両面の完成を目指し、学習成績が振るわないと、有用な選手でも、レギュラーから外すことがあるという。

一方、日暮先生は、米国でバスケをしたいと留学を果 たし、ロングビーチ校でレギュラー選手として活躍され、 今もそこの体育館に日暮先生の顔写真が飾られている。 講師の先生お二人に、強いチームのコーチ・監督は何が 違うのか語り合って頂いた時、「指導者の力量不足が、焦 りとなって選手に暴力を振るう。それが、練習中、試合中 に口汚く罵る結果になる。米国では、コーチが興奮し過ぎ て、試合中のコートに入り込んで選手をど突いたり、選手 にボールをぶっつけたり、椅子を投げ込む過激な行為を して試合会場から追放される場面も多々ある。」というそ の迫力に学生諸君らは驚いていた。また、科学的な見地で、 「緊張させると筋肉が強張って、筋の末端まで酸素が行 き届かなくなり、選手が持っている本来の筋力を発揮でき ず、プレーにミスが起きる結果に繋がる。」という話は、ス ポーツ指導には大いに科学的思考が必要であると関心 を与えていた。質問時間で、現在指導している少年チーム で直面しているコーチング上の問題点について慣れない 英会話を交えて熱心に質問したことに講師陣が感銘した ことが、講演会後に届いたDawn Graff-Haight先生から の便りに記されている。

I would like to thank the two programs and the people who provided the support for me to travel to Japan to give this talk. I was pleased with the excellent turn out of students from Osaka Sangyo University. It was a very large room and it was filled to capacity. In addition, I was also very impressed with how professionally dressed the students were. American students rarely dress up for classes, so this was quite different from my usual experience. I was very gratified after our talk to be approached by several students who asked specific questions about situations they are experiencing with children they are coaching. Kyoko and I made suggestions on how to approach this difficult

situations, and I feel that those students left the session with the intention to take a more positive approach to building a commitment among the athletes on their teams. Dawn Graff-Haight



講師① Dr. Dawn Graff-Haight, Prof. of Health Education, Dep. of Health, Human Performance and Athletics, Linfield College, OR, USA.



② 日暮恭子先生、バスケットボール 女子ユニバーシアード日本代表 チームマネージャー



(スポーツ健康学部 スポーツ健康学科

学会報告



平成29年度 年次報告

平成 29 年度 学会常任委員長 東良 徳一

大阪産業大学学会は、その会則にありますように「学 術・研究・教育の発展および普及に寄与し、あわせて研 究助成等を図ることを目的とする」組織です。これらの目 的を遂行するため、「大阪産業大学論集」「大阪産業大学 学会報」の発行、「学術講演会」等の講演会・研究会・シ ンポジウム・学外研修会の開催、教員会員だけでなく学 生会員の研究教育活動の助成、海外留学の助成等の事 業、さらには、主に学生会員を対象とする各種コンテスト やさまざまの学外見学会を行っています。

今年度は、学会常任委員長の2年の任期の2年目とい うことで、これまでの執行部が心がけていた「会員の皆様 からいただいた会費を、意義のある活動を通じて積極的 に還元していく」という姿勢に加えて、就任時に掲げていた 「学生会員の学会活動への参加機会の拡大」という方針 をさらに進めていくことに注力させていただきました。

まず、昨年度に改正した「出版助成規定」をさらに改正 し、非商業出版および学生による出版への助成範囲の拡 大と助成申請の受付けを年一回から随時受付けに制度 改正することにしました。また、「企画関連事業に関する 規定」につきましては、ゼミナール単位の授業外での見学 会についても助成できるよう改正することになりました。

さらに、学生会員だけでなく全ての会員の皆様により学 会活動を知っていただき、学会活動により多く参加していた だくために、学会の公式Webサイトを大幅に改修しました。 この学会公式サイトにはデジタル化された過去の「大阪産 業大学論集」も掲載してあります。大学のサイトに学会公式 サイトへのリンクを設定してありますのでご利用ください。

今年度、学会が主催した講演会は、日本の言語学者で ある金田一秀穂氏をお迎えした「世界一受けたい日本語 の授業」だけでしたが、スポーツ健康学部主催の「熊本地 震復興支援チャリティ講演会」と「体罰に頼らないスポー ツ指導を目指して」と題した講演会、経営学部主催の「第 4次産業革命時代における経営・流通に関する特別学 術講演会」、経済学部主催の「日中大学院生学術フォーラ ム」の後援をさせていただきました。

学生会員を対象にしたコンテストはこれまでの「ぶんが くコンテスト」と「写真・イラストコンテスト」に加え、今後、 学生会員の希望とアイデアを取り入れた見学会を企画で きるよう「見学会プランニングコンテスト」を行いました。 このコンテストの結果は来年度以降の見学会に反映す ることになります。今年度の見学会は、これまで行ってきた 「鈴鹿サーキットでの安全運転研修」「羽田機体工場見 学会」「東京証券取引所と各種メディア(テレビ朝日・読 売新聞)見学会」「全国美術館巡り(今年度は富山ガラス 工房・富山ガラス美術館・富山県立美術館)」「神戸港 の各種施設見学会(造船所・コンテナヤード・税関)」「和 菓子作り体験会(滋賀県大津市叶匠壽庵)」に加えて「陶 芸作り体験会(兵庫県篠山市陶の郷)」を開催しました。

その他、学会の大きな役割の一つである「大阪産業大 学論集」の発行、出版助成1件、海外語学研修参加学生へ の援助金の支給、海外留学補助(4名)、デザイン工学部 建築・環境デザイン学科の「卒業研究優秀作品展」への 助成、多くのゼミナールの卒業論文集への助成などさまざ まな活動を通して、目標としていた「会員の皆様からいた だいた会費を、意義のある活動を通じて積極的に還元し ていく」と「学生会員の学会活動への参加機会の拡大」が かなりの程度実現できたのではないかと考えております。

最後になってしまいましたが、これらの活動を推し進め ていただきました今年度の常任委員の皆様、特に、個別 の活動を調整していただきましたチーフ会メンバーの宮 田実先生(国際学部)、大津山澄明先生(工学部)、齊藤 立滋先生(経済学部)、大垣斉先生(デザイン工学部)、青 山一樹先生(全学教育機構)のご尽力・ご助力には心か ら感謝しております。さらに、教育研究推進センターの髙 木裕子さん、学会事務局の桐本加奈さん、薮中恵理さん、 田嶋啓子さんには学会の日常的運営活動において一方 ならぬお世話になりました。この稿をお借りして厚く御礼 申し上げます。

(経営学部 経営学科 教授)

平成29年度 学会活動報告

【評議員会】

第1回評議員会	6月20日	議題①平成29年度学会行事予定表について ②平成28年度会計報告 ③平成28年度会計監査委員報告 ④平成29年度の各委員の作業目標 ⑤平成29年度出版助成審査委員の選出 ⑥その他
第2回評議員会	3月20日	議題①平成29年度活動報告 ②平成30年度チーフ会人事について ③平成30年度活動方針について ④平成30年度学会予算(案)について ⑤会則・規程集改正(案)について

【常任委員会】

新旧合同常任委員会 (評議員会終了後)	3月20日	議題①新常任委員の委員会及び役割分担決定 ②平成29年度委員から平成30年度委員へ引き継ぎ
------------------------	-------	--

【出版助成審查委員会】

出版助成委員会	6月20日	議題①出版助成申請書類一式 ②見積書
---------	-------	-----------------------

【会計監查】

5月23日 平成28年度会計監査

【チーフ会】

第1回チーフ会	4月18日	第7回チーフ会	11月21日
第2回チーフ会	5月23日	第8回チーフ会	12月 5日
第3回チーフ会	6月 6日	第9回チーフ会	1月23日
第4回チーフ会	7月18日	第10回チーフ会	2月20日
第5回チーフ会	9月19日	第11回チーフ会	3月 6日
第6回チーフ会	10月17日		

【編集委員会】

第1回編集委員会	4月18日	第6回編集委員会	10月17日
第2回編集委員会	5月23日	第7回編集委員会	11月21日
第3回編集委員会	6月 6日	第8回編集委員会	1月23日
第4回編集委員会	7月18日	第9回編集委員会	2月20日
第5回編集委員会	9月19日		

【平成29年度発行論集・学会報】

種 別	分 野	巻 号 数	備 考
	経営論集	19-1,19-2	年3回 原稿募集
	経済論集	18-3、19-1、19-2(退職記念号)	年3回 原稿募集
論 集	人文・社会科学編	30, 31, 32	年3回 原稿募集
	自然科学編	_	年3回 原稿募集
	人間環境論集	17	年1回 原稿募集
学 会 報		53	年1回 発行

【介画委員会】

第1回企画委員会	4月18日	第5回企画委員会	10月17日
第2回企画委員会	5月23日	第6回企画委員会	11月21日
第3回企画委員会	7月18日	第7回企画委員会	1月23日
第4回企画委員会	9月19日	第8回企画委員会	2月20日

【企画事業】

◆学会コンテスト

第18回 ぶんかくコンテスト

第2回 写真・イラストコンテスト

第 1 回 見学会プランニングコンテスト

◆第5回 関西国際空港見学会

8月9日 機內食工場見学、機內食体験、関西国際空港見学

◆第13回 鈴鹿安全運転研修

8月31日~9月1日(1泊2日) 鈴鹿サーキット内交通教育センター研修とホンダ技研鈴鹿工場見学

◆第6回 羽田機体工場見学会

9月 6 日~ 9月7日(1泊2日) ANA機体メンテナンスセンター、JAL SKYMUSEUM 工場見学

◆第4回 東京証券取引所と各種メディア見学会

9月7日~9月8日(1泊2日) 東京証券取引所、読売新聞東京本社、テレビ朝日見学

◆第2回 和菓子作り体験会

11月4日 叶匠壽庵で和菓子作り体験

◆第3回 全国美術館巡り

11月5日~11月6日(1泊2日) 富山ガラス工房体験、富山ガラス美術館見学、富山県立美術館見学

◆第4回 神戸港の各種施設見学会

11月6日 神戸税関、神戸港ベイクルーズ、上組コンテナターミナル見学

◆初開催 陶芸作り体験会

11月10日 丹波伝統工芸 立杭焼き作り体験

◆講演会

11月20日 金田一秀穂氏学術講演会「世界一楽しい日本語の授業」

◆シンポジウム

12月9日 第4回日中大学院生学術フォーラム&アジア共同体研究センター国際シンポジウム 「グローバル化とその反発-生活・移動・通商」

◆プロジェクト

4月1日 新入生歓迎企画「入学宣誓式プロジェクト」

◆研究会

経済学部研究会 全4回

<共催>

◆研究展

2月 2日~2月 5日 建築・環境デザイン学科 優秀卒業研究展・修士研究展2018

<後援>

◆講演会

6月10日 熊本地震・復興支援チャリティー講演会

10月13日 第4次産業革命時代における経営・流通に関する特別学術講演

11月 7日 「体罰に頼らないスポーツ指導をめざして」日米の比較調査から見えてくるコーチングのあり方

11月15日 国際学部開設記念講演会

▶活動への助成

アメリカスポーツ医学会のレセプション参加への助成 5月31日

6月24日~6月25日 第54回 日本文芸学会全国大会への助成

8月 6日~8月11日 野球部員による東日本大震災復興支援ボランティアへの助成(8日~9日 2日間の助成)

9月18日~9月20日 輪島朝市の見学、和菓子制作体験、金箔作り体験、およびゼミ合宿への助成

【海外語学研修参加学生への助成】

平成29年度夏季海外研修生への支援

【広報】

10月 2日 学会Webサイトリニューアル

【法務】

規程改正検討

【財務】

毎月の学会会計処理(事務局)後に伝票の確認および預金通帳残高との照合(本会計)

【大阪産業大学学会会員一覧】

(人)

	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
学生会員(院生)	172	136	113	108
ル (大学生)	8,273	7,929	7,780	7,771
〃 (短大生)	155	27	1	- *
正 会 員(専任教員)	236	230	226	218
特別会員	5	2	4	2
準 会 員(非常勤・卒業生)	20	21	25	21
名誉会員	8	10	9	11
賛助会員	0	1	1	2
計	8,869	8,356	8,159	8,133

12月末現在の会員数

※大阪産業大学短期大学部は平成28年度をもちまして、廃止いたしました。

平成28年度 学会会計報告 (平成28年4月1日~平成29年3月31日)

平成 28 年度 財務委員長 齋藤 立滋

大阪産業大学学会の平成28年度の収支決算を以下 の通り報告いたします。

収入の部では、学会費などの収入小計は昨年度に比べ 約69万円の増収となりました。

支出の部では、支出小計が昨年度に比べて約681万円 の増加となりました。これは、学生会員を対象としたイベ ント・諸活動が充実したことによるイベント費訳183万 円の増加、諸活動費約120万円の増加、新たに設けられ た学生表彰費125万円の増加、講演会費約88万円の増

加、また、論集発行費約155万円の増加などが挙げられ ます。

今年度は、各種見学会やコンテストなどのイベント、学 術研究書出版助成などの各種助成の活性化をはかる一 方、学生表彰の新設など学生会員への会費の還元に務め ました結果、次年度繰越金は約1,549万円減りました。

今後も、学会の諸活動をさらに活性化することにより、 会員への会費還元に務めていきます。

【収入の部】

(単位:円)

科		本年度予算額	本年度決算額	増減
学会費(学生)		19,150,000	21,192,500	2,042,500
ル (正・準)		1,234,000	1,271,000	37,000
受取利息		15,000	4,944	△10,056
雑収入		600,000	532,560	△67,440
(/]\	計)	20,999,000	23,001,004	2,002,004
前年度繰越金		104,611,968	104,611,968	0
合	計	125,610,968	127,612,972	2,002,004

【支 出 の 部】

(単位:円)

科	目	本年度予算額	本年度決算額	増減
論集発行費		7,500,000	5,539,280	△1,960,720
学会報発行費		1,800,000	1,553,775	△246,225
講演会費		1,500,000	995,060	△504,940
イベント費		4,600,000	6,259,237	1,659,237
諸活動費		1,500,000	2,326,360	826,360
海外留学補助金		400,000	0	△400,000
出版助成		3,800,000	3,492,864	△307,136
ウェブサイト保守点検費		259,000	291,600	32,600
人件費		3,200,000	3,282,354	82,354
旅費交通費		10,000	0	△10,000
会議費		100,000	168,480	68,480
渉外慶弔費		250,000	30,000	△220,000
印刷製本費		300,000	186,183	△113,817
通信輸送費		200,000	268,110	68,110
消耗品費		80,000	92,362	12,362
福利厚生費		15,000	73,500	58,500
雑費		10,000	2,484	△7,516
学生表彰費		0	1,250,000	1,250,000
法定福利費		35,000	38,990	3,990
(/]\	計)	25,559,000	25,850,639	291,639
50周年記念追加事業費		5,000,000	3,908,125	△1,091,875
前年度仮払金精算		7,227,158	7,227,158	0
60周年記念事業繰入金		1,500,000	1,500,000	0
次年度繰越金		86,324,810	89,127,050	2,802,240
合	計	125,610,968	127,612,972	2,002,004

編集後記

『大阪産業大学学会報』第53号をお届け致します。 第53号の特集テーマは「未来と夢」です。

一昨年度は大阪産業大学創立50周年の節目の年でした。また、大阪産業大学学会は今年度が発足50周年であり、さらに来年度は1928年(昭和3年)11月に大阪鉄道学校として本校が創立されて90周年という年であることから過去を振り返り、未来に向けて夢と希望を持てるように「未来と夢」というテーマになりました。

1897年(明治30年)10月、熊本の第五高等学校創立記念の祝辞の中で教員総代として夏目漱石(金之助)は、幕末の英傑佐久間象山を例にあげつつ教育が建国の基礎であり、また「師弟の和熟が教育の基本である」と説いています。また、本学ライオン像台座にも「阿呍会得」と共に「師弟共感」の文字があります。このように、学園においては教員と学生がお互いに和やかに共感しあうことが大切といえます。その手段の一つとして本学会報がお役に立てれば幸いです。

本号の内容は、「特集」テーマの「未来と夢」に関する執筆者各位の思いや関西国際空港見学会や東京証券取引所と各種メディア見学会などの企画事業の詳細、熊本地震・復興支援チャリティー講演会、言語学者金田一秀穂氏の講演会報告など盛りだくさんとなっています。特に学生会員の皆さまにも共感いただけるような内容と体裁を心がけました。

本学会は学術・研究・教育の発展および普及に寄与し、研究助成等を図ることを目的としています。本学会報により、会員の皆さまの学会活動へのご理解が深まり、学会が発展し、またさらに皆さまそれぞれの「未来と夢」へつながれば幸いです。

最後になりましたが、本号発刊にご協力いただいた編集委員をはじめとする学会各委員の皆さま、寄稿いただいた 各位、そして学会事務局に厚く感謝致します。

(平成29年度編集委員長:大津山 澄明)

All rights reserved. No part of this publication may be reproduced or transmitted, in any from or by any means, without prior permission in writing from the publisher.

大阪産業大学学会報 第53号 [非売品]

発行日 2018(平成30)年3月5日

発 行 大阪産業大学学会 〒574-0013 大阪府大東市中垣内3丁目1-1 TEL (072) 875-3001 (大代) FAX (072) 875-6551

印刷 友野印刷株式会社 〒700-0035 岡山市北区高柳西町1-23 TEL (086) 255-1101 FAX (086) 253-2965



